NIPPON TAIWAN 2019

日台文化交流
青少年スカラシップ

第16回　研修旅行の記録

NIPPON TAIWAN 2019

第16回日台文化交流 青少年スカラシップ
入賞者（順不同）

作文部門

大　賞

橋本　真那　文教大学付属高等学校 3年

優秀賞

今井　大貴　明治学院大学 1年
加藤　遼　明治大学付属明治中学校 1年
岸　ふみ　長崎県立諫早高等学校附属中学校 2年
纐纈栄美子　東京都立豊多摩高等学校 1年
嶋田　羽瑠　清水国際高等学校 2年
高橋凛々子　東京中華学校 中学 2年
花村　隼　渋谷教育学園幕張中学校 2年
吉澤　杏梨　愛知県立千種高等学校 3年

奨励賞

荒川　朱暖　立命館守山高等学校 3年
伊藤　花純　翔凛高等学校 2年
井上　実　兵庫県立大学附属高等学校 1年
上原　梨沙　立教大学 3年
上村　七海　三重県立相可高等学校 3年
大澤　祥子　市立札幌旭丘高等学校 1年
川本　里奈　高田中学校 2年
黒川　海結　東京中華学校 高校 2年
澤木穂乃花　明治大学付属明治中学校 1年
田島　拓実　東京大学教育学部附属中等教育学校 高校1年
津島　聖也　明治大学付属明治中学校 1年
照屋　真希　沖縄県立普天間高等学校 3年
日改　理加　東京大学教育学部附属中等教育学校 高校1年
守　祐香　聖ウルスラ学院英智高等学校 2年
諸星　舞　明治大学付属明治中学校 1年

佳　作

安藤　梨桜　広島女学院中学高等学校 2年
石川　夢美　東京大学教育学部附属中等教育学校 高校1年
工藤　歩　横浜中華学院 中学3年
國吉　日彩　名桜大学 3年
小比賀　結　東京都立豊多摩高等学校 1年
張アクア紅実　東京都立豊多摩高等学校 1年
長谷川圓佳　大阪中華学校 中学1年
福本　康顕　須磨学園中学校 2年
舟山　優也　山形大学 3年
丸川　紗英　三重県立相可高等学校 3年
三浦　直矢　法政大学 2年
宮部　正毅　ラ・サール高等学校 2年
森部　真由　聖ウルスラ学院英智高等学校 2年

スピーチ部門

審査委員長特別賞

大月　陽菜　青稜高等学校 2年

優秀賞

小川晃司アンジェロ　聖学院高等学校 3年
櫻井　萌子　宇都宮大学 4年
山崎　七菜　文教大学付属高等学校 3年
横田　真桜　横浜中華学院 高校2年

奨励賞

秋元　康宏　東京電機大学 3年
江成　志織　桐光学園高等学校 3年
周防　彩華　横浜中華学院 高校 2年
関　風輝　平成国際大学 2年
高橋　志織　宇都宮大学 4年
平野　喬大　聖学院高等学校 2年
村上　舞優　横浜中華学院 高校2年

※学校名、学年は2019年3月現在

実施報告

日本と台湾の若い世代の相互理解と交流を目的とした「第16回日台文化交流青少年スカラシップ」は、作文(日本語)とスピーチ(中国語・台湾語)の2部門で学生・生徒から募集し、611人の応募がありました。2019年3月19日に東京・大手町のサンケイプラザで授賞式を行い、受賞学生による5泊6日の台湾研修旅行を19日から24日まで実施しました。

主　催：産経新聞社　　日本工業新聞社(フジサンケイビジネスアイ)
共　催：台北駐日経済文化代表処
特別協賛：アパホテル　JR東海
協　賛：EVA AIR　MITSUI&CO.　臺灣新聞社 TAIWAN NEWS
協　力：外交部　教育部　台湾日本関係協会　Taiwan 台湾観光局
後　援：公益財団法人 日本台湾交流協会 Japan-Taiwan Exchange Association　自由時報

審査委員 (敬称略)

審査委員長　渡辺　利夫　拓殖大学 学事顧問

作文部門審査委員

張 温 恭	台北駐日経済文化代表処 広報部 次長
さかもと未明	アーティスト
室舘　勲	株式会社キャリアコンサルティング 代表取締役
林 翠 儀	自由時報 東京特派員
山本　秀也	産経新聞社 論説委員 兼 フジサンケイ ビジネスアイ 編集長
上坂　徹	日本工業新聞社 フジサンケイ ビジネスアイ 代表取締役社長

スピーチ部門審査委員

顧 欽 誠	台北駐日経済文化代表処 広報部 部長
馮 彦 國	横浜中華学院 校長
呉 育 珊	東京中華学校 教諭
林 翠 儀	自由時報 東京特派員
山本　秀也	産経新聞社 論説委員 兼 フジサンケイ ビジネスアイ 編集長

Scholarship Travel to Taiwan

2019年 3月19日(火)

9:30	授賞式(大手町・サンケイプラザ)
14:00	成田国際空港発(エバー航空)
17:05	台湾桃園国際空港着
19:00	夕食(ゴールデンチャイナ)

3月20日(水)

9:30	行天宮観光
11:00	教育部表敬訪問
12:30	昼食(大戈壁)
14:00	外交部国際伝播司・亜東太平洋司表敬訪問
15:30	総統府表敬訪問
17:00	円山大飯店(グランドホテル台北)観光
18:30	台湾歌壇との懇親会(兄弟大飯店)

3月21日(木)

8:46	台北駅発(台湾高速鉄道)
10:14	嘉義駅着
11:00	烏山頭ダム、八田與一記念館見学
13:00	昼食(湖境渡假会館)
15:00	台南観光(藍晒図文創園区、林百貨店、赤崁楼)
17:30	夕食(台南赤嵌坦仔麺)
19:41	台南駅発(台湾高速鉄道)
21:42	台北駅着

3月22日(金)

11:00	友愛グループとの懇親会(済南鮮湯包)
14:00	学校訪問(中・高校生:延平高級中学、大学生:東呉大学)
17:00	ホームステイ

3月23日(土)

9:30	学生討論会
12:00	昼食(聚馥園)
13:30	淡水観光(淡水紅毛城、雲門舞集、淡水老街)
18:00	夕食(丸林滷肉飯)
19:00	夜市観光(士林市場)

3月24日(日)

9:00	国立故宮博物院見学
11:00	昼食(新上享)
15:20	台湾桃園国際空港発(エバー航空)
19:20	成田国際空港着
21:30	東京駅着

授賞式、「台湾と日本の架け橋」に期待

「第16回日台文化交流青少年スカラシップ（日台スカラシップ）」の授賞式及び懇親会が3月19日、サンケイプラザ（東京都千代田区）で行われました。

授賞式には、台北駐日経済文化代表処の謝長廷代表も出席し学生達に激励の言葉をかけたほか、受賞者を代表して作文部門の「コンテンポラリー界を先駆ける台湾」で大賞を受賞した橋本真那さん（文教大学付属高等学校3年生）に表彰状を授与しました。

作文部門の受賞者

授賞式後の懇親会には、受賞者の学生達や審査員の方々が出席し、各々の作品や、台湾の現状についてなどの会話で交流を深めました。

今回で16回目となる日台スカラシップでは、作文部門とスピーチ部門の2部門で学生を募集し、例年平均の400人を大きく上回る611人の応募者の中から14人が大賞、審査委員長特別賞、優秀賞をそれぞれ受賞しました。

スピーチ部門の受賞者

そのうち作文部門優秀賞の嶋田羽瑠さん（清水国際高等学校2年生）と吉澤杏梨さん（愛知県立千種高等学校3年生）は都合により参加は叶いませんでしたが、ほかの12人の受賞学生は同日より、日台スカラシップの賞として主催側から贈られた5泊6日の台湾研修旅行に出発しました。

懇親会では審査委員や過去の日台スカラシップ受賞者も参加し、交流が行われました

授賞式には受賞者、協賛者のほか、多くの関係者が参加しました

台北駐日経済文化代表処 謝長廷代表によるご挨拶

第16回「日台文化交流 青少年スカラシップ」に入賞され、これから台湾研修旅行にご出発のみなさんに、この場をお借りして、まずお祝い申し上げます。おめでとうございます。

「日台文化交流 青少年スカラシップ」は、今後の台湾と日本の新世代の交流の懸け橋となる人材となっていただくことを願い、今年で第16回目の開催となりました。これまでに237名が台湾研修旅行に参加し、皆さんの先輩には、台湾に留学したり、台湾に関係する仕事に就いた人もいて、台日友好の頼もしい懸け橋になっています。

今日、会場にいる受賞者のみなさんは、厳しい審査を経て選ばれたわけですが、みなさんが、作文やスピーチに込めた台湾への熱い思いを、ぜひこれから自分なりの形で実践していただければと期待しています。

みなさんがこれから出発する台湾への研修では、台湾がどのような国か実際に見ていただき、学校訪問やホームステイでは台湾の同世代の若者との交流を通して、ぜひ台湾の友達をたくさん作ってください。みなさんがこれから見聞を広めていく上で、大いに役立て、ご自身の成長の糧になるよう願っています。最後に、産経新聞社およびフジサンケイビジネスアイのますますのご発展と、今回の台湾研修がよい旅となりますよう祈念いたします。

台北駐日経済文化代表処の謝長廷（しゃちょうてい）代表

大賞・橋本真那さんによる受賞スピーチ

この度はこのような素敵な賞を頂き、大変嬉しく思っております。また研修旅行を始めとする数々の貴重な機会を与えて頂き、心から感謝しております。この場をお借りしまして、スピーチをさせて頂きます。

私は今回コンテンポラリーダンスについての作文を書かせて頂きました。日本では未だマイノリティーで一般的にもあまり知られていませんが、台湾では非常に認知度が高く、国民的人気を誇る雲門舞集を始めとしたコンテンポラリーダンスカンパニーも数多く存在します。私はこのコンテンポラリーダンスを通して、芸術面における日台の文化交流をより発展させたいと思っております。

私は昨年韓国で開催されたコンテンポラリーダンスのプログラムに参加しました。そこで3人の台湾人コリオグラファーと出会い、さらに韓国、マカオの仲間と共に中国舞踊や日本舞踊を織り交ぜた1つの作品を制作、発表しました。制作中は、言語を始めとする文化や習慣の違いに壁を感じることも多々ありました。しかしながら、国境を超えたコリオグラファーとダンサー、そしてお客様までもが一体となり調和していく感覚に私は心地良さを感じました。

私の作文にもあるように、コンテンポラリーとは他のどのジャンルにも分類できないダンスのことを指す、と言われています。そのため各国の伝統舞踊などを取り入れることが可能であり、さらにそのような作品を各国で上演することによって、文化交流に繋がると確信しています。また、ダンスには言語がないという点でも、国境を超えた交流の手段に最適だと思います。まずは今回の作文を通して、少しでもコンテンポラリーダンスについて興味を持ち、知って頂けたら幸いです。そして、日台間の文化交流におけるコンテンポラリーの可能性を感じて頂けたらと思います。

最後になりますが、改めましてこのような素晴らしい機会を与えて下さいました産経新聞社、フジサンケイビジネスアイ、台北駐日経済文化代表処を始めとする皆様に感謝を申し上げます。

そして本日から始まる研修旅行を通し、仲間と共に台湾への知識や理解をより一層深め、日台の文化交流に貢献できるよう精進して参りたいと思っております。

大賞を受賞した橋本真那さん

這次非常感謝各位給我們這麼寶貴的機會，透過這次的研修旅行我們可以學習更多跟台灣有關的知識。為了促進日台文化交流，今後我們也會繼續努力。謝謝大家。

陳副総統を表敬訪問し、貴重なお話を伺いました。※6～7頁の写真は中華民国（台湾）総統府提供

陳建仁副総統を表敬訪問

日台文化交流青少年スカラシップの受賞学生12人は研修旅行の2日目である3月20日、総統府を訪れ、陳建仁副総統と面会しました。初めての総統府訪問で緊張していた学生達を陳副総統は笑顔で歓迎し、一人一人と握手を交わしました。陳副総統から直接激励の言葉をかけられた学生達にとって、同訪問は今回の研修旅行の意義を改めて実感する貴重な体験となりました。

日台スカラシップの一行は3月20日、中華民国総統府を表敬訪問。陳建仁副総統と面会しました。この日は学生達のほか、日本工業新聞社（フジサンケイビジネスアイ）の上坂徹社長と産経新聞社の山本秀也論説委員、産経新聞社台北支局の田中靖人支局長も同行しました。

普段は一般公開されず、特別な来賓だけが通行を許されている総統府の正面玄関。今回日台スカラシップの学生達はここからの入館を許可され、中の応接間にて陳副総統との面会を待ちました。陳副総統を待つ間、学生達は準備されていた歓迎のお茶を頂きましたが、中にはこのお茶の美味しさと茶器の美しさに驚きの表情を浮かべる学生もいました。

緊張感に包まれた応接間に陳副総統が入室すると、学生達は一斉に起立し拍手で陳副総統を迎え、それに対し陳副総統は学生達一人一人と握手を交わしながら歓迎の意を伝えました。握手の際に、学生達は一人ずつ中国語で自己紹介を行いましたが、陳副総統は「皆さん中国語が通じるので、今日は通訳がいらないみたいですね」と場の雰囲気を和らげるような言葉をかけていました。

青少年交流の発展に期待

陳副総統は面会で、「本日、日本の新世代の皆さんとお目にかかれた事、大変嬉しく思います。皆さんの台湾での体験、台湾への認識、また同世代の台湾の若者との交流が出来る事を心より歓迎します」と歓迎の意を述べられた後、「この場をお借りして産経新聞社と日本工業新聞社が16年来、台日青少年交流に尽力された事に感謝します」と話しました。

また、「我が国の政府は青少年の交流を極めて重視しており、台湾の若者が世界に向けて歩み、見聞を広める事

研修旅行団への記念品を受け取る日本工業新聞社の上坂社長（左）

受賞者一人一人と握手を交わす陳副総統（右）

を奨励しているほか、諸外国の若者が台湾で多元的な社会発展を体験して頂く事も歓迎しています」と述べた上で、「日本は我が国にとって重要な隣国です。両国は歴史や文化、外交、経済などの分野で密接な関係があります。我々は新世代の各方向の交流を通じて両国の友好関係が末長く発展できるよう切に願っています」と、台湾と日本の若者との関係のさらなる発展にも言及しました。

世界に誇る台湾と日本の関係

さらに、近年になって台湾と日本が防災、文化、教育、観光及び青少年交流の分野での交流がますます緊密になり、双方の地方自治体間もこれまでに１２７件の友好交流協定を締結している事を説明し、「台日双方の公的機関が行ったアンケート結果によると、双方の国民の好感度は常にトップレベルにあります。これは台日友好関係の質と量は世界各国の見本になれる事を示しています」と、台湾と日本の関係性が世界に誇れるものであると、学生達に伝えました。

続けて、自然災害が発生した際にも、台湾と日本はお互いに援助の手を差し伸べてきた事に触れ、この事実を陳副総統は「まさかの時の友こそ真の友」と表現し、実際に１９９９年の台湾中部大地震、２０１１年の東日本大震災、２０１６年の台湾台南と日本熊本の地震、２０１８年の台湾花蓮の地震と西日本の集中豪雨などの自然災害が発生した際にも家族のようにお互いを労っていた事を説明しました。陳副総統は「台湾と日本の真心を込めた善の循環が末長く受け継がれ、次世代の若者達に受け継がれれば」と希望を語りました。

16年来の日台スカラシップにおける功績に言及

続けて陳副総統は、日台スカラシップが開催されてから16年目となり、毎年４００人以上の中高生及び大学生が選考に応募し、これまでに２３７人のＯＢ・ＯＧが台湾を訪れ、多元的な文化や社会発展を経験してきた事に言及。「ＯＢ、ＯＧの中には卒業後、台湾に留学に来た人もいれば、台湾交流と関係のある仕事に就いた人や、学校で教鞭をとっている人、かつての台湾訪問の経験を生かして教材にした人もいるそうです。また、今回の作文コンテスト受賞者に、台湾のコンテンポラリーダンスに興味を持ち、将来台日の舞踊交流発展に取り組みたいという学生さんがいると聞いています。また、ある学生さんは台湾鉄道の駅弁から台日文化交流の面白さを見出したという事です。さらに何名かの学生さんは湾生の孫として祖父母と親の台湾に対する特別な思いを受け継いで、交換留学生として来台、あるいは台湾で生活した経験があり、引き続き台湾の経済発展や文化に関心を寄せているそうです」と今回の学生達の作品を例に出し、「皆さんの台湾に対する格別な思いと情熱を拝見し、実に喜ばしく思っています」と語りました。

最後に、台湾と日本の友好関係は諸先輩方の双方の理解と信頼で築き上げてきたという事を伝え、「皆さんも諸先輩方と同じく、台湾と日本を繋ぐ架け橋となって頂きたい」と述べ、学生を激励しました。

お話しの後には、学生達からの質疑にも応答するなど、日本の学生達の言葉にも真剣に耳を傾けていました。

最後は日本工業新聞社の上坂社長がお礼の言葉を述べ、記念品の交換、全員での記念撮影を行い、学生達は総統府を後にしました。学生達も陳副総統の和やかな人柄に惹かれた様子で、帰りのバスでは学生同士、初めての総統府訪問について感想を話し合う姿が見受けられました。

教育部を訪問、台湾の教育制度の現状に理解を深める

日台スカラシップの一行は研修旅行の2日目である3月20日、初の訪問先として台湾の教育部を訪れ、教育部国際及両岸教育司の林世英副参事を表敬訪問しました。日本への留学を経験し、長年日本の台北駐日経済文化代表処で教育部長として活躍した林副参事は流暢な日本語で学生達に、台湾の教育制度や台湾の教育制度の現状などを話しました。

台湾の教育部を訪問

学生達は3月20日、台湾教育行政の最高機関である教育部を訪問。教育部国際及両岸教育司の林世英副参事と面会しました。

日本工業新聞社の上坂徹社長は冒頭、「今回の参加者の中には台湾での生活を経験した学生や、今後台湾への留学を希望している学生もおります。今回は改めて教育の現状を教えて頂ければ幸いです」と挨拶しました。

林副参事はこれに対し、台湾の教育制度や留学の意義について、さらに言語を学ぶ上でのポイントなど、自らの経験を交えて挨拶しました。

お話しの中で林副参事は、特に若い世代が海外へ留学に行く事について言及。「留学の意義は、外国に行って勉強する事だけではありません。今の時代は国際移動の時代。留学によって生涯計画が決まるのです。若いうちに海外に出向いて勉強し、様々な経験をする事で、皆さんそれぞれの未来が変わってきます」とし、台湾や他の海外への留学に対して歓迎の意を伝えたほか、「教育部としては、皆さんが台湾に留学にいらした時により良い環境を提供できるように尽力します」と話しました。

教育部前にて記念撮影

また、質疑応答の時間には学生から次々と質問が飛び交い、林副参事は1つ1つ丁寧に質問に答えていました。最後には記念撮影を行い、学生達は初めての台湾政府訪問を終えました。

学生達からは多くの質問が飛び交いました

教育部国際及両岸教育司の林世英副参事

質疑応答

Q 小川晃司アンジェロくん（聖学院高等学校3年生）

国の発展の根源は教育だと思っています。台湾では小学校で独自の教育方針はありますか？

A 林世英副参事

実は台湾の小中高の教育方針を現在改正しているところです。おそらく今年の8月に新しい教育方針が実施される予定です。その中で一番中心となる価値観は、「台湾が自らを主体性のある国と認識する」事です。今台湾は政治の中で厳しい環境に置かれています。台湾の歴史、社会を認識しなければなりません。教科書の中にも「台湾認識」の項目があります。台湾の歴史、社会、文化を守らなければならないと私は考えています。

Q 横田真桜さん（横浜中華学院高校2年生）

日本の学生に対する印象と、日本の学生に期待する事は？

A 林世英副参事

日本人の方は最近よく、「台湾が好き」と言ってくれるが、好きだけでは駄目だといつも思っています。行動が大切です。我々が期待する人材は、ただ台湾が好きなだけではなく、台湾と日本の交流を促進するための行動をとれる学生です。皆さんは今回の研修をただの思い出にせず、日本に戻ったら是非クラスメイトや家族に少しでもこの経験をシェアしてほしいと思います。

外交部国際伝播司及び亜東太平洋司を表敬訪問

帰りに通りかかった行政院前で記念撮影

3月20日、学生達は外交部国際伝播司の齊永強副司長及び亜東太平洋司の黄明珠専門委員を表敬訪問しました。齊副司長と黄専門委員は、学生達の台湾への理解を深めてもらうため、台湾に関する映像を放映したほか、学生達からの質疑応答にも熱心に答えていました。また、その後訪れた総統府での陳副総統訪問でも同席しました。

日台スカラシップの学生達12人は3月20日、外交部を訪れ、外交部で国際情報を伝える役目を担う外交部国際伝播司の齊永強副司長と、亜東太平洋司の黄明珠専門委員を表敬訪問しました。

訪問ではまず、海外へ台湾を伝えるために製作された外交部のＹｏｕＴｕｂｅチャンネル「潮台灣（Ｔｒｅｎｄｉｎｇ Ｔａｉｗａｎ）」のショートビデオが2本放映され、学生達は映像で台湾への知見を広げました。また、学生達へのプレゼントとして、台湾のＭＲＴで使用できるＩＣカード「悠遊卡」の外交部限定版が贈られました。

国際伝播司の齊永強副司長

亜東太平洋司の黄明珠専門委員

齊副司長はビデオ鑑賞の後、「台湾と日本の相互留学生は年間９０００人以上です。また、年間３００以上の政府や企業の団体が台湾を訪れていますし、台湾から日本を訪れる観光客も益々増えています」と外交状況を伝えた上で、「このような人の往来が台日外交関係を築いていくものと感じております」と述べ、今後も学生達には交流を続けて欲しいという希望を伝えました。

一方の黄専門委員は、「実は以前、台北駐日経済文化代表処に駐在していた際に、日台スカラシップを担当していましたので、皆様にはとても親近感を感じています。これからも台日交流が盛んに行われる事を祈念しています」と述べました。

その後は、総統府訪問への移動の途中で通りかかった行政院の入り口前で記念撮影を行い、全員で総統府へ向かいました。

真剣な表情で話しを聞く学生達

延平高級中学を訪問

学校訪問で同世代との交流、延平高級中学と東呉大学で過ごした貴重な時間

3月22日、学生達のうち、中学生及び高校生は私立延平高級中学（高校）へ、大学生は私立総合大学の東呉大学をそれぞれ訪問し、若い世代同士での文化交流を図りました。台湾人学生と日本人学生における共通点や相違点の発見を通じ、多くの刺激を受けました。

延平高級中学の学生と文化交流

3月22日の午後、日台スカラシップの中学生と高校生10人は台北の名門校・私立延平高級中学を訪れ、同校の中学生及び高校生と青少年同士の交流を深めました。学生達が到着すると延平高級中学の劉永順校長を始めとした先生方、学生達が出迎え、校内へ案内してくれました。

会議室で行われた交流会では、冒頭、日本側の学生を代表して大月陽菜さん（青稜高等学校2年生）が台湾生活で培った流暢な中国語で挨拶をすると、劉校長も驚きの表情で「彼女の中国語力は素晴らしい」と称賛していました。

延平高級中学の学生らが日本の学生達に対し英語で同校の紹介を行った後、台日の学生達は、小正月を意味する元宵節にちなんだペーパークラフト体験、英語のクイズゲームなどを通じて交流を深めたほか、湯圓やフルーツなどを用意し、おもてなしをしてくれました。交流会終盤には、日台スカラシップの学生らがお礼の気持ちを込めてアイドルグループ嵐の「ふるさと」を披露。

その後、学生達はパートナーである台湾人学生と共にホームステイ先に向かいました。ホームステイで学生達はパートナーとそのご家族と一緒に観光や食事に出かけるなどして、親

中国語で挨拶をした大月さん

台湾の学生は優しく接してくれました

交を深めました。学生の中には、「ゆっくりと同世代の台湾人に話しを聞く機会となり、とても実りあるものでした。今後も連絡を取り続けたいです」と話す人もおり、学生にとって同世代との交流は刺激的で貴重な体験となったようでした。

お礼の歌を披露する日本の学生達

東呉大学日本語学科の学生とマンツーマンの青年交流

台湾私立大学の名門、東呉大学の外双渓キャンパスは、台北郊外の閑静な丘の斜面にあります。水と緑に囲まれたこのキャンパスで、大学生受賞者の櫻井萌子さん、今井大貴さんは、日本語文学系（日本語学科）の張桂娥副教授の指導を交えて、在学生の陳巧蓉さん、陳宣澔さんとの学内交流とホームステイに臨みました。

拓殖大学で日本留学を経験したという陳宣澔さんは、流暢な日本語で今井さんと日台の就職活動の違いなどを紹介。陳巧蓉さんは関心の高い関西地方の言葉や文化について、自身の理解を櫻井さんに説明しました。「互いの文化をもっと知りたい」という共通の知的関心のもと、初対面とは思えない打ち解けた交流となりました。

恒例のキャンパスツアーでは、日本語文学系が実物教育の場として誇る畳敷きの「和室」を始め、歴史家、儒学者として名高い銭穆の敷地内に残る旧居を訪れる機会にも恵まれました。

東呉大学でマンツーマンの学生対話

東呉大学ご自慢の和室で

日本文化を伝える学内掲示に見入る

歴史の生き証人、日本語世代の皆さんに刺激を受けた学生達

学生達は3月20日と22日、台湾における日本統治時代に日本の教育を受けた世代（日本語世代）の方々が所属する、日本語で短歌を詠む集い「台湾歌壇」と「友愛グループ」の皆さんとの懇親会に参加しました。最年長はなんと93歳という日本語世代の方々との交流により、若い学生達は多くの学びを得ることができました。

台湾歌壇の皆さんと

友愛グループの皆さんと

3月20日《水》台湾歌壇の皆さんとの食事会

台湾の政府機関の訪問を終えた一行は研修2日目の夜、兄弟大飯店にて台湾歌壇の方々との懇親会に出席しました。台湾歌壇は結成してから50年以上が経つ歴史のある会です。日本語世代の方のほか、日本に興味を持つ若い台湾人の方や、台湾在住の日本人の方も所属しています。

作家・司馬遼太郎の著書『街道をゆく 台湾紀行』で現地の案内役を務める「老台北」として登場し、日台の文化交流に尽力した事を理由に2014年に旭日双光章を受章した功績を持つ故・蔡焜燦さんが2008年から代表を務めていた事でも多くの方に知られる会です。学生達は初めて日本語世代の方と交流する事で、様々なアイデンティティーに触れ、大きな刺激を受けました。

世代を超えて元気に乾杯！

台湾の歴史などを優しく教えてくれました

台湾歌壇の皆さんは日本語がとても綺麗

3月22日《金》友愛グループの方々と交流

研修旅行の4日目の昼、学生達一行は済南鮮湯包で友愛グループの皆さんと懇親会を行い、日本語世代の方々と交流しました。友愛グループからは14名の日本語世代の方々が参加し、学生と日本語世代の皆さんが交互に着席し円卓を囲み、美味しい料理を頂きながら、台湾と日本の歴史のお話しなどを生き証人の皆さんから伺いました。懇親会が終わっても学生達は日本語世代の皆さんと記念撮影をするなど、名残惜しい様子が見受けられました。

友愛グループは美しい日本語を残すため、現在でも定期的に日本語の先生を招き日本語の勉強を続け和歌や短歌を創作している熱心な日本語世代の方々が集う会です。また、代表の張文芳さんは2015年に旭日双光章を受章されています。

山本論説委員の話しに積極的に質問する学生ら

学生討論会開催、参加学生達が意見を共有

学生達は研修旅行終盤の3月23日、宿泊するホテルに併設された会議室で学生討論会を行いました。これまで一緒に旅をしてきた学生同士が改めて自らの応募動機や台湾に対する思い、今後の目標などを発表し合ったこの討論会は、お互いに刺激し合い、高め合うための貴重な時間となりました。

3月23日、前日のホームステイの興奮冷めやらぬ学生達は一旦ホテルに戻り、ホテル内の会議室で産経新聞社の山本秀也論説委員の司会進行のもと、学生討論会を開催。

まず、2班に分かれた学生達は、これまでの研修旅行の感想や各々のバックボーン、応募動機、帰国後の目標などを共有し話し合いました。その後、1人ずつ意見や思いを発表しました。

まだ知り合って5日目とは思えないほど仲を深めていた学生達。ここで改めて学生同士が真剣に、どのような思いで日台スカラシップに応募したのか、今回の研修旅行でどのような感想を持ったのかなどを話し合う事で、学生自らも自分の気持ちを整理し、また、新たな発見をした実りある時間となりました。

山本論説委員は学生達に対し、「今回の研修旅行はもちろん台湾がテーマですが、皆さんはまだ若いので、世界は日本と台湾だけで終わるのでは残念な事だと思います。見ておいた方が良い物や経験は、他の国にも沢山あるという事は忘れないでください」と話し、視野を広く持つ事を学生達に伝えました。また、台湾と諸外国の関係性や、政治についてなど、台湾について幅広い観点から説明しました。

台湾について、真剣に話し合いました

今後どのように台湾と関わりたいか?

纐纈栄美子さん

参加者の皆さんが中国語を話している中で、自分が話せない事にとても悔しい思いをしました。将来はコンサートに関わる仕事がしたいので、台湾でコンサートがある時などに中国語を使えるように真剣に勉強したいです。

高橋凛々子さん

台湾は景色や旅行、グルメなどが有名ですが、歴史などについては教科書にも書いていないので、今後、日本で台湾の歴史についても広めていきたいと思いました。

山崎七菜さん

今回、現地の台湾の方と交流をして、教育の質が高く、政治にも関心が強い事に驚きました。日本人は今のままではアジアの国々に置いていかれるのではないかと思います。私はこれから留学をし、他の国に負けないように、日本に帰ってきた際には何かしら国を支える仕事ができたら嬉しいです。

各地の観光名所で感じた台湾文化

日台スカラシップの学生一行は研修旅行期間中、台北から台南まで様々な観光地にも足を延ばしました。観光を通じて、台湾の今昔を体感し、歴史や文化への理解を深めました。

中国の宮殿のような円山大飯店で

台北で台湾の今と昔への見識を広げる

学生達は研修旅行プログラムの合間を縫って、台北市内を観光しました。「行天宮」、「国立故宮博物院」、「円山大飯店」などの歴史的な観光名所だけでなく、「士林夜市」や「誠品書店」など現在の台湾での生活に密接に関わるスポットなども訪れました。

日台スカラシップの一行は3月20日、教育部訪問の前に商売繁盛の神様「関羽」が祀られている寺廟「行天宮」を訪れ、お参りをしました。また、行天宮に向かうまでの地下街では占い横丁も見学し、台湾らしい風景に学生達は興味津々の様子でした。同日、政府機関の訪問を終えた一行は、台湾歌壇の方々との懇親会までの時間に中国宮殿建築様式のホテル「円山大飯店」を参観しました。円山大飯店は日本との所縁のあるホテルです。日本統治時代に台湾神宮があった跡地に建てられた円山大飯店では今でも当時の神社の前にあった銅竜を見る事ができます。学生達はホテルの豪華な外観、内観に興味津々のようで、写真撮影や展示の見学など、それぞれ思うままに過ごしました。

3月22日には台湾で老若男女問わず愛されている総合書店「誠品書店」も訪れました。ここは2004年に雑誌「TIME」アジア版により「アジアで最も優れた書店」にも選ばれるなど、今では台湾が誇る観光スポットの1つ。観光客だけではなく、地元の方もよく訪れる場所です。2019年秋には、東京・日本橋に日本一号店の開店も予

国立故宮博物院本院の前で

行天宮にて

中国語の本を選ぶ2人

定されるなど大注目の書店。学生達は中国語勉強用の書籍など、それぞれ興味のある分野の書籍を購入しました。

研修旅行最後の夜となった3月23日の夜には、台北市内で最も有名なナイトマーケット「士林夜市」を散策しました。地上では夜市ならではの射的ゲームなどを楽しみ、地下のグルメエリアではずらりと並んだ多様多種の台湾グルメに目移りしながら台北の夜を堪能しました。

平和を意味する「平安」カードゲット

真剣に鑑賞する学生達

士林夜市に来ました

最終日の3月24日に訪れたのは世界4大博物館の1つでもある「国立故宮博物院」の本院。残念ながら一番有名な「翠玉白菜」と「肉形石」は他の展示会への出展のため観る事は出来ませんでしたが、その他の貴重な文物を自らの目で鑑賞しました。何度か訪れた事がある学生もいましたが、改めて真剣な面持ちで同院所蔵の文物への理解を深めました。

台湾南部で日本と台湾の歴史的繋がりを学ぶ

烏山頭ダムで記念撮影

学生達一行は3月21日、台湾の南部へ1日観光に向かいました。行き先は台湾の古都と言われる台南。台南では「八田與一記念館」「烏山頭ダム風景区」「赤崁楼」「藍晒図文創園区」「林百貨」を巡りました。

日台スカラシップの学生達は3月21日、台北駅から台湾高速鉄道（新幹線）に乗車し台湾南部へ向かいました。嘉義駅で下車した学生達はバスに乗り、台南最初の観光地である「八田與一記念館」へ。到着すると幸運な事に記念館横でタイミング良くダムの水量調整が行われており、勢い良く流れ出すダムの放水を見学する事が出来ました。その後は記念館で烏山頭ダムを建設した水利技術者・八田與一氏についての紹介ビデオを鑑賞。さらに、八田氏の銅像の前で記念撮影を行った後、実際に広大な烏山頭ダムを訪れ、当時烏山頭ダムを建設した八田氏の偉大な功績を肌で感じる貴重な時間を過ごしました。

台湾高速鉄道で台南へ

お昼を烏山頭ダム風景区内のホテル「湖境渡假会館」でとった後は、台南市内の「藍晒図文創園区」を訪れました。このエリアは日本統治時代の建築物をリノベーションし、おしゃれに生まれ変わった観光スポット。台湾の創作アイテムなどを扱う雑貨店や、カフェ、アイスクリーム店などが軒を連ねるほか、建築物の壁にはフォトジェニックなアートが施されているため、学生達は記念撮影に大半の時間を費やし、同じ志を持つ仲間との思い出を残しました。

そして、次に向かったのは、こちらも日本統治時代に実際にデパートとして使用されていた建物をリノベーションした「林百貨」。日本統治時代の台南において唯一近代的エレベーターを備えていた事でも有名で、現在でも当時の面影が至る所で見られます。現在の林百貨ではレトロで可愛い台湾のお土産などが販売されていて、屋上には神社もあり、学生達はここでも台湾と日本の歴史的関わりを感じ取りました。

八田與一と同じポーズで

藍晒図文創園区はフォトジェニックなアートが沢山！

台南で最後に向かったのは鄭成功と所縁の深い台南最古の歴史建造物「赤崁楼」です。オランダ人の手によって建造され、1983年に国の一級古跡にも指定されています。学生達は赤崁楼内の展示物を熱心に見学しました。一行はその後夕食をとり、台湾高速鉄道に乗って台北へと戻りました。

赤崁楼を訪れました

林百貨でショッピング！

ノスタルジックな淡水で新たな台湾発見！

学生達は3月23日、台北の北部に位置する淡水の観光へ向かいました。淡水観光では、大賞を受賞した橋本真那さん（文教大学付属高等学校3年生）の作品で紹介された台湾におけるコンテンポラリーダンスカンパニー「雲門舞集」の劇場見学や、淡水老街、淡水紅毛城なども散策し、ゆったりとした空気の流れるロマンチックな雰囲気を堪能しました。

紅毛城にて

3月23日、日台スカラシップ一行は学生討論会を終えた後、淡水を観光しました。淡水観光での最大の目的は大賞受賞者、橋本さんの作品で紹介された台湾におけるコンテンポラリーダンスカンパニー「雲門舞集」の劇場見学です。当日は劇場での舞台は見る事が叶いませんでしたが、劇場のオブジェやポスターなどを通じて「雲門舞集」への理解を深め、新たな台湾発見となりました。橋本さんは、「舞台は見られなかったけど、実際に劇場を訪れる事が出来て嬉しかった」と感想を話しました。

一行が次に向かったのは淡水の「紅毛城」です。ここは1628年、当時台湾北部を拠点としていたスペイン人により建設され、スペイン勢力撤退後はオランダ人により1644年に再建された淡水地区の古跡。学生達は「紅毛城」内の展示物を鑑賞し、当時の雰囲気に浸りました。

その後は淡水の定番観光スポット「淡水老街」を散策。名物の鐵蛋や、長いソフトクリームなど、淡水グルメに舌鼓を打ちました。

橋本さんは念願の雲門舞集劇場で
ダンスポーズを披露

指す仲間との6日間 in TAIWAN

Memories of the Travel

「日台の懸け橋」を目

作文部門
大賞

コンテンポラリー界を先駆ける台湾

●橋本　真那　文教大学付属高等学校 3年

コンテンポラリーダンスをご存知だろうか？ 聞いたことがある人も、あるいは全く知らない人もいるだろう。実は、このコンテンポラリーダンスは台湾に大きな関わりを持っている。私はダンサーを目指す身として、ここ数年台湾に大きな注目と夢を抱いている。

そもそもコンテンポラリーダンス、略してコンテとは、どのようなダンスなのであろうか。まさに、その答えは無いに等しい。なぜなら、その他のどのジャンルにも分類できないダンスをまとめてコンテとしているからである。そのためコンテにおける定義は非常に曖昧であるが、非古典的という点で世界を先駆すると言われているのは確かである。「舞踊といえば西洋」という概念が薄まりつつも未だ顕在する現代では、無論アジアのコンテも認められていなかった。しかしながら近年その概念を覆したのが、台湾のコンテンポラリー・ダンス・カンパニーである雲門舞集であった。だが、その歴史は決して短くも、容易なものでもなかった。1973年に元小説家の林懐民氏が創設して以降、彼らが非常に長い年月コンテを踊り続け、地道に実績を重ね続けたことによって、アジアのコンテは西洋においても徐々に認められるようになってきたのである。以来、アジアにおけるコンテ界は非常に栄え、現在も進化し続けているが、その根本には彼らの不断の努力があることを私たちは忘れてはならない。雲門舞集は今もなおアジアのコンテ界を率い、世界のトップを走り続けている存在である。

このことがきっかけとなり、私にとって台湾は非常に興味深い国となった。ダンスを学び、そしてコンテを学び、その道へ進みたいと思う私にとって、台湾は大きな希望となった。冒頭部分で記したように、私はダンサーを目指しているわけだが、より正確に言えば、コンテンポラリーダンスのコリオグラファーを志している。コリオグラファーとは、すなわち振付師のことを指す。そして日台を始めとするアジア界における文化や伝統を取り入れた作品を制作し、各国で上演することで、文化交流を促し国交向上に貢献していきたい。そのためには、まず世界の最先端を駆けている台湾で、最先端のダンス技術や知識を学ぶことが不可欠だと思ったのだ。

台湾で踊りを学ぶという目標のため、私は約2年前から中国語の勉強を始めた。幸いにも、高校の修学旅行先が台湾だったので、中国語を教えてくれる親切な現地の友達もできた。そして台湾留学という夢への第一歩として、昨年の夏に韓国で知り合った台湾人3人のコリオグラファーとコンテのクリエーションを行なった。これは1週間で1つの作品を作り上げるというプログラムであり、今回私はダンサーとして参加した。彼らはもちろんプロのコリオグラファーであるのだが、まだ中国語が拙い学生である私の意見を聞き入れ、さらには数々のアドバイスもしてくれた。台湾のダンス事情についても、丁寧に教えてくれた。台湾の大学は芸術大学に限らず、常に最新の技術や知識を取り入れるため、国を挙げて様々な国との交換留学を積極的に行なっているらしい。このことには特に感心させられ、台湾がダンス界で最先端に立っていることにも納得がいった。そんな彼らと作り上げたコンテの作品は、言うまでもなく、台湾伝統の中国舞踊と日本舞踊を織り成したものである。その作品は、韓国の大田で開催されたフェスティバルでの上演を通し、多くの人々にシェアされた。終演後、日台韓の観客がお互いの舞踊の違いについて語り合い、楽しそうに交流する姿を見て達成感に溢れたあの時の気持ちは、今でも鮮明に覚えている。私はこの経験を通して、「文化交流に貢献する活動をしていきたい」という自らの強い想いを再確認することができた。また、コリオグラファーたちの優しさに触れ、沢山の学びを得たことで、「台湾で踊りを学びたい」という想いが一層強まった。そして現在、私は台湾の芸術大学に進学することを目指し、自身の中国語とダンスの更なる上達に励んでいる。

台湾と日本の国交は、現時点でも良好だと言えるだろう。歴史的にも深いつながりがあり、日本人として嬉しいことに「親日」の台湾人も多くいる。しかしながら芸術面においては、まだまだ足りないように感じるのである。私は、ダンスには「言語がない」という点で、国境をも超えることができると確信している。だからこそ、国同士の友好関係を良くするためには最適な手段だと思うのだ。将来私は台湾の大学で学んだ全てのことを生かし、コンテンポラリーという芸術を通して、日台の文化交流をより発展させていきたい。そして、さらにアジア全体の国交良化に繋げていきたい。これが私の目標であり、人生最大の夢である。

作文部門
優秀賞

私にとっての大きな学び

●今井　大貴　明治学院大学 1年

私は「私にとっての大きな学び」というテーマと題して台湾留学生との交流、2週間の台湾研修に参加し感じ考えたこと。また、自分の将来に対する考え方、自分の将来像についてここに書きたいと思う。

私は大学に進学すると同時に大学の国際学生寮に住むことになった。そこでは多くの留学生と日本人学生が交流を図ることができる。私は多くの留学生と関わっていく中である台湾人留学生と知り合った。その留学生は、日本のことについてよく知っており、台湾のことについても教えてくれた。台湾人留学生の紹介で他大学の台湾人留学生とも仲良くなるきっかけがあった。そのようなこともあり、私自身台湾に対してとても関心を抱き、より台湾のことについて知りたくなった。そんな最中、大学の講義一環として台湾研修があることを知り参加したいという気持ちが芽生えた。しかし、台湾のことを何も知らない私は台湾の歴史や文化について学ぶ必要があると考えた。そして、学んでいくうちに私の曽祖父は日本統治時代台湾に赴き現地の台湾人学生に日本語を教えていたということが分かった。そのことを知った私はとても台湾に親近感が湧いたのを覚えている。台湾の経済成長の推移と当面の見通しとして台湾経済についても考察した。2017年現在の台湾経済は、経済回復を受けた外需と堅調な民間消費により通年で2.86％の成長率を確保したということが分かった。そして、半導体が主力輸出品目である台湾は輸出を牽引役に高成長が続いている。しかし、台湾の国土は日本の九州程度で資源に乏しく人口も2300万人であるため内需も知れている。これまで安い労働コストを武器にIT・半導体関連の産業で稼いできたが、将来的にはベトナムやフィリピン、インドなどに生産拠点を移しシェアを奪われる可能性もあるのではないだろうか。台湾が今後も経済成長を続けていくためにはITや半導体産業以外の産業を育て上げ経済的リスクを分散する必要があるのではないだろうかと考えた。

台湾研修では、日本台湾交流協会や台湾に進出する日本企業として安心食品モスフードサービスやキッコーマン、味の素を訪問させて頂いた。モスフードサービスは日本とは経営戦略を違う形で取っていることが分かった。立地の展開では台湾の交通手段としてバイクが主に使われる。そのため、バイクが入りやすいところなどに店舗展開していることが分かった。また、商品の違いではキヌアが使われたライスバーガーが特徴的であり日本との商品展開の違いを知ることができた。キッコーマンでは、台湾で製造されている醤油と日本で製造されている醤油の味見を実際にさせて頂いた。台湾の現地の味覚に合わせて製造しているのが「甘醇醤油」であり、本醸造醤油に糖類を加えた甘い味になっている。日本の醤油と台湾の醤油の味見をさせていただいたが、台湾の醤油は日本の醤油にはない甘さを感じた。現地の人の味覚に合わせて味を変えていくことはすぐにできることではない、長年に渡る多くの人の努力が今に繋がっているのではないだろうかと考えた。

この台湾研修を通して様々なことを感じ考えた。台湾の学生との交流は、はっきりと言語の壁というものを感じた。中には日本語や英語を話すことのできる生徒もいれば中国語しか話せない生徒もいた。そんな中でも何とかしてコミュニケーションを図りたいと思う自分がいた。そして、話したいことが互いに通じ合ったとき笑顔になり嬉しさが溢れ出たことがとても印象に残っている。話しても通じ合えないこともあったが一生懸命に伝えようとすることが大切であると感じた。生活環境も文化も互いに違うが、共通の話題の話の盛り上がりは一言で言い表すことのできないものであった。

そんな台湾のことについて学んでいくうちに自分の将来像というものが浮かんできた。それは、日本と台湾の関係を繋ぎ、より両国の良さを知ってもらうということだ。そのために私は大学で学んでいる経営学を活かして将来日本と台湾を繋ぐ会社を経営したいと考えている。具体的なことはまだ漠然としているが10代から30代の女性をターゲットした美容やコスメに関する商品開発をおこないたいと考えている。現在、両国の商品が互いに取り入れられていくなかで私は新たな商品を開発し日本と台湾を繋ぐ架け橋となりたい。

グローバル化が進む中で日本のみならず世界各国の人と交流していく必要を大いに感じ、私自身もしっかりと今後のことを見据えて今何ができるのか、何をしたいのか明確にした上で多くのことに挑んでいきたい。

作文部門
優秀賞

謝謝台湾

●加藤　遼　明治大学付属明治中学校 1年

僕は父の仕事に帯同して四歳から十歳までの六年間、台湾の台北に住んでいました。二年間現地の幼稚園に通い、四年間台北日本人学校に通っていました。僕は台湾での生活を通し本当に台湾と台湾の人が大好きになりました。そんな台湾の魅力を沢山の人に知ってもらいたいと思います。

台湾は沖縄県の南西に位置する九州位の小さな島国です。気候は一年中温暖ではっきりとした四季がなく長い夏と短い冬があるのみです。人々は明るく大らかで細かい事を気にしません。街は朝から晩まで一日中活気に溢れており、街から離れると自然が多くのんびりと時間が流れています。静と動がはっきりしている所が魅力だと思います。

台湾は世界一の親日国と言われています。台湾に親日家が多い理由は日本統治時代に道路、電気、下水道整備、病院や学校の建設など台湾の発展に尽力をつくした日本人が多数いた事が大きな理由です。

台湾の人々に神様の様に崇められている八田與一という日本人がいます。八田與一は豊かな田畑を作る為に十年もの歳月をかけ命がけで烏山頭ダムを建設しました。八田は指導者として威張るようなところは全くなく、自ら危険な場所に足を踏み入れ、マラリアに三度もかかり、毒蛇に何度もかまれ、苦心の末に巨大ダムを完成させたのです。ダムの建設中、落盤事故などで134人が犠牲となりました。この慰霊碑には八田の強い希望により、全員の名前が日本人と台湾人を区別することなく亡くなった順番で彫られています。1930年の完成当時には東洋一の規模を誇るものでした。水害と干害で不毛の地だった嘉南平野は台湾最大の穀倉地帯になりました。このダムは今でも台湾の人の生活に大変役立っています。台湾の人々は八田への感謝の気持ちを込めてダムが完成した翌年に八田の銅像を建てました。

台湾を訪れた年配の日本人は古き良き日本を感じると言います。僕の祖父母も数回台湾に遊びにきましたが、どこか懐かしい昔の日本を思い出す。といつも言っていました。僕には古き良き日本がわかりませんが、台湾の方がとても人情に厚い事は知っています。渡台して間もなくの頃六歳、四歳、二歳の三人の子供を連れている母はいつも台湾の人に助けられたと言います。バスに乗れば座ってる人が一人ずつ子供を抱っこしてくれ、鼻を垂らしている子がいれば周りの方がテッシュで鼻を拭いてくれ、薄着をさせているともっと着せなさいと注意され、妹の髪を結んでいると痛そうだからとゴムを外してくれたり・・・ちょっとおせっかいと感じることもあったけれど、子供は国の宝。と考える台湾人が日本人の子も同じように宝物として扱ってくれた事が本当に嬉しかったと母は言います。

台湾の御老人は暑さが和らぐ夕方になると公園で井戸端会議を始めます。夕方の公園で流暢な日本語を話すおじいさんとお話した事があります。統治時代の日本教育が台湾人に近代国家として恥じない最高の道徳を身に着けさせてくれた。だから台湾人は日本に感謝しているんだよ。この先も日台の絆は固くて確かなものであって欲しい。と話してくれました。台湾の人がこの様に思ってくれている事を日本の人は知っているでしょうか？ 僕は日本の人に台湾の事をもっと知ってもいたいと思っています。

台湾に渡り一年が経った2011年3月11日、東日本大震災が発生ました。台湾のニュースでも連日大きく取り上げらました。自分たち家族が日本人と分かると、「日本の家族は大丈夫ですか？」「一日も早い復興をお祈りします」など温かい言葉を連日かけて頂きました。日本加油‼ 日本がんばれ‼ という横断幕がいたるところに掲げられ募金活動もあちらこちらで行われていました。僕が一番驚いたのは若い大学生が家の下にあるコンビニで1000元単位で募金している姿です。「謝謝」と父が言うと「今月は服も買わない。お酒も飲まない。生活を切り詰めれば大丈夫。それより日本の復興を願っています。」と言うのです。日本の為に自分の生活を切り詰めてまで募金してくれるという彼らの気持ちに胸をうたれました。彼らの優しい気持ちと行動に家族全員涙がとまりませんでした。

台湾の人口2357万人。平均年収は日本の二分の一程度です。そんな九州位の小さな島国から280億円もの巨額の義援金が届いたのです。台湾から巨額の義援金が届いた事は日本でも報道されていましたが、台湾の人々が自分の生活を切り詰めてまで日本の為に募金してくれた事実はあまり理解されていないと思います。僕はこの事を多くの日本人に知ってもらいたいです。

僕はいつか僕を温かく受け入れてくれた台湾の人々に恩返ししたいです。これから先もずっと台湾は僕の故郷です。

作文部門
優秀賞

「台湾の駅弁」と、そこから見えてきた平和

●岸　ふみ　長崎県立諫早高等学校付属中学校 2年

「駅弁」それは列車の旅に欠かせないもの。
『駅弁は知っているけれど、台湾とどんな関係が？』と思う人もいるでしょう。まずは、私が「台湾に関すること」という作文で駅弁に注目した理由を書きたいと思います。

以前「全国駅弁人気ランキング」というテレビ番組を見る機会がありました。そこで紹介された駅弁は「イカめし弁当」や「海鮮丼弁当」など私の住む長崎県では販売していないような物でした。そこで『じゃあ、長崎県にはどんな駅弁があるのだろう』と思い、長崎駅に行った時に見てみました。すると「角煮めし弁当」や、長崎は鯨が有名なので「鯨を使った弁当」などがあり、「駅弁は、販売している地域のおいしい物や文化がつまっている」と知りました。そこで、駅弁を見れば台湾のおいしい物や文化などが分かるかもしれないと思い、駅弁に注目しました。

始めに「台湾駅弁」とインターネットで画像検索しました。すると検索結果の大部分は、白ご飯の上に、弁当の半分以上もの大きさの肉とゆで卵、そして野菜がのった弁当でした。この肉は骨付きバラ肉という意味の「パイクゥ」という、台湾のどの駅弁屋でも売っているほど人気がある食べ物です。日本で「全国共通の駅弁」というのは聞いたことがないので、これは日台の駅弁で違う点だと思います。また、違う点は他にもあり、最も違う点は値段でした。日本では1000円以上する物をよく見かけますが、台湾では安い物は台湾ドルで60元、つまり日本円で約240円の物もあるのです。台湾鉄路管理局のホームページを見ても、80元や100元、つまり約320円や約400円の物が多く、台湾の駅弁はかなり低価格と分かりました。低価格なうえに、しかも、ボリューム満点なので、もし私が台湾の駅弁を見かけたらすぐに購入してしまうでしょう。

日本と違う点が多い台湾の駅弁ですが、日本との繋がりも多くあります。そもそも、駅弁は日本から伝わった物で、現地では中国語で便利という意味の「便当」と呼ばれます。この「便当」という言葉、日本語の「弁当」とそっくりです。さらに、最近の便当には日本の習慣である防腐のための梅干しが入っていることもあるそうです。

このように、日台は食で深く繋がっていると分かります。そこで『駅弁以外にも食の交流があるかもしれない』と思い、台湾に進出している日本の飲食企業について調べてみることにしました。なんと、日本で誰もが知っている飲食企業が多く台湾に進出しているのです。例えば、定食の「やよい軒」や寿司の「くら寿司」牛丼の「すき家」や「吉野屋」ラーメンの「一風堂」ハンバーガーの「モスバーガー」などです。飲食企業が海外進出する際は、出店先の味に合わせることが原則でしたが、日本企業の台湾への進出の場合、日本の味を変えずに提供することができているそうです。私は『日台の人々は味覚が似ているのかもしれない』と嬉しくなりました。そして、私が最も驚いたのは「モスバーガー」の台湾版のホームページを見た時です。漢字ばかりが並んだ中に、なんとカタカナが使用されている部分があったのです。「ヌードルバーガー」や「アイス」という文字を見た時、私は感動しました。日本特有のカタカナという言語が台湾で使われていることを知り、『日本は世界と繋がっているんだ』と鳥肌が立ちました。また、台湾から日本に進出している飲食企業もあります。かき氷店「アイスモンスター」などです。長崎県には店舗がないため食べたことはありませんが、いつか食べたいと思っています。このように駅弁以外にも日台の食の交流は深いことが分かります。

今私は、『日台はなぜこんなに仲が良いのか』という疑問を持っています。私が母に台湾のイメージを聞いてみると「親日ということかなあ」と言いました。それを聞いて私は、台湾が、日本で東日本大震災がおきた時に多くの支援をしてくれたことを思い出しました。また、台湾人の好きな国、行きたい旅行先の1位は日本だそうです。こんなに仲の良い2国ですが、戦時中、台湾は日本の植民地だったことを父が教えてくれました。同じように日本の植民地だった韓国と日本の関係は友好的とは言えませんが、日台は仲が良いです。私にとって最大の謎は「台湾は日本に植民地にされていたのに、なぜ、現在日台の仲が良いのか」ということです。この謎は、インターネットや本で調べればすぐに答えが出るかもしれません。しかしそこで得た情報は“単なる知識”でしかありません。現地の人に直接話を聞いたり、自分の目で見たり、ふれあったりすることで、初めて自分の中で“生きた知識”になるのだと思います。

「かつて植民地だったけれど、現在は仲の良い日台」この2国の関係には、世界平和に繋がるヒントが隠されていると感じています。

「世界平和への第一歩」それは、日台関係から始まっていくと、私は信じています。

作文部門
優秀賞

台湾語の魅力

●纐纈　栄美子　東京都立豊多摩高等学校 1年

私は好きなグループの1人が台湾語を喋れることで台湾語に興味を持った。
台湾語の話者数は約1650万人で、台湾の74%である。中国語という大きなくくりの中の方言とみなされている。台湾人の先祖は福建省から移住してきた人が大半であるため、台湾語は閩語の南部方言である閩南語に似ている。日本語も台湾語に影響を与えており、今でも残っている。昔、台湾は日本に統治されていたためである。調べてみると面白いものも出てきたので、紹介したいと思う。

「トラック」や「バカ」、「ちょっと待て」など、沢山の台湾語が出てきた。これらは全て、字は漢字である。しかし驚いたことに、ひらがなも使われている。それは「の」である。日本語と同じ意味で使われている。外国人は漢字に興味を持つイメージが強いため、ひらがなが外国にあることが珍しく感じた。もう1つびっくりしたのは、「アタマコンクリ」という言葉である。これを初めて見たときは、笑いが止まらなかった。日本語らしいけど、日本語では組み合わせないような言葉で、少し違和感を感じた。意味はなんとなく想像がつくような、頭がコンクリートのように固い「融通の利かない人」という意味だが、頭がコンクリートのように働かない、転じて「頭が悪い」というニュアンスで使われることが多くなってきている。この言葉には「阿達馬孔固力」という当て字がある。これもザ当て字がって感じがして、少し面白かった。

私は台湾語を調べてみて、学んでみたいと思い始めた。しかし、台湾語を学ぶ前に中国語を学ぶべきらしい。だから、少し気が早いが中国語をマスターした後、台湾語をスムーズに学べるよう、台湾語と中国語の違いについても調べてみた。台湾語は中国語のくくりの中の方言のようなものと最初に紹介したが、調べてみると、いくつかの違いを知ることができた。

1つ目は文字だ。一般的に中国では簡体字が使われますが、台湾では繁体字が使われることが多いらしい。また、ふりがなに関しても、中国語ではアルファベットを用いた拼音が使われているが、台湾語では注音記号が使われている。拼音を用いて中国語を書いても、台湾人は読むことができない。逆に注音記号を用いて中国語の文を書いても、中国人には理解できない。

2つ目は語彙だ。動詞や形容詞などは基本的には同じだが、名詞によっては使う言葉が違うことがある。最も異なるのが、最近急速に普及してきたインターネットに関わる言葉たちだ。例えば「ブログ」は、台湾語では「部落格」と書くが、中国語では「博客」と書く。

3つ目は発音だ。台湾語の大きな特徴として「軽音」をあまり使わないというのがある。「軽音」は「四音」のどれにも属さない声調で、短く切るように発音するものだ。ちなみに「四音」とは、中国語において意味の区別に用いる音の高低の4つパターンのことである。台湾語では「軽音」を使わず、「四音」を使う場合が多い。

このように、台湾語と中国語の違いがわかり、台湾は独自の文化を築いているというのがわかった。台湾語はもともと、中国語だった。人によっては、これは台湾の文化だと思わない人もいるかもしれない。しかし日本も、もともと中国の漢字から、今私たちが使っている漢字が出来た。この漢字が、外国人にとっては日本の文化で、外国人の間で人気を得ている。日本の漢字のように、ある国から得た物を独自の文化に変化させる、すなわち、中国語と日本語をもとに台湾語を生み出し、それを自国の文化とすることができているのではないかと思った。

最近、台湾語を自分たち台湾人の言語として重要視するようになってきたという。それは他の方言と比べても印象強いもので、若者の間は台湾語を織り交ぜて話すのがカッコいいという風潮も生まれ始めている。若者だけでなく年配の方には、中国語をあまり話せず、台湾語だけで話している人も多い。だから、台湾語を守っていくことに対しては問題ないと思う。

しかし、台湾語の知名度を上げる必要があると思った。文化はたくさんの人に知ってもらってこそ、であると思う。私も最初、「台湾語ができます。」と聞いた時、台湾語というものがあるのかと驚いた。母も私が台湾語の話をした時、同じ反応をしていた。日本人観光客もたくさん行く台湾で、台湾自体の知名度は高いのに、台湾語の知名度が低いのは、台湾語に触れる機会が少ないからだと思う。だから私は台湾語を学び、たくさんの日本人に台湾語を知ってもらいたい。そして今学んでいる英語も活用して、世界中の人に台湾語を知ってほしい。

作文部門
優秀賞

台湾を訪れて

●嶋田　羽瑠　清水国際高等学校 2年

「そういう考え方もあったのか!」これは私が台湾の高校生との会話で思ったことである。初めてその言葉を聞いたとき、私は言葉も出なかった。

2018年11月中旬、私は修学旅行で台湾を訪れた。観光や食文化を堪能しつつ、人生で最高のときを過ごしていたのだが、私はこの旅行の目標を立てていた。それは、台湾の人から日本に対しての印象を直接聞くことだった。私は修学旅行前に世界から見た日本について調べた。ほほ笑みを浮かべられるほどの良いコメントもあれば、がっかりするほど悪いものもあった。これを知った私はメディアが都合よく、情報を偽って流しているだけなのではないかと不信感が沸いた。それにケジメをつけるためにその目標を立てたのである。そのために、不器用な英語で西門町などで質問したが、大体返ってくるのは、「日本は台湾を統治したとき、治安を良くしたし、インフラ設備も改善したから。」や「文化が趣深く、清潔だから。」などの言葉だった。これらを聞いて、メディアは偽ってはいなかったと安心し、それに対する信頼も回復した。そのような状態で現地の高校生と交流をし、色々と他愛もない会話をした後、日本について聞いてみたが、案の定、予想通りの答えが返ってきた。他の話にと話題を変えようとしたとき、その高校生が突然、「他者への理解について考えたことがあるか。」と。あまりに唐突な質問の上、真剣な話になったので驚いたが、私は「いや、全く。」と返事をした。そして彼は真剣な眼差しで、「異文化理解なども同じことだが、理解には多少の妥協が必要だと思うんだ。何事も理解しようとしても人なのだから、理解できないこともある。全てを理解しきれないから、摩擦が起こるのであって、これは理解できないなと思って気にしない、妥協すれば摩擦も起きないと思うんだ。こういう風に考えると、個々の好き嫌いとかはあるかも知れないが、妥協によって、今のように激しく嫌うことはなくなるのではないか。」私はその話を聞いて、言葉が出なかった。国々の間の摩擦は人間関係、人種、思想、文化の違いが関係している。理解しようとして自分を抑え込むようなことをしたら、それはそれで意見を言えない状態になってしまう。しかし、妥協によって、自分が理解できるように形を変形できるのである。理解できないなら、できないで良い。そういう考えが必要である。今までのような理解の概念では、さすがに限界がある。理解とは、できるものはできるで、できないものはできないと区別をつけること。それが柔軟な吸収につながることである。彼の発言は私に刺激を与えた。

この台湾での出会いによって、自分の視野が広がり、考え方に良い刺激を与えられた気がする。日本と台湾は人間的にも思想的にも共通点があるから、手を取り合えているが、イスラエルとパレスチナのように未だに争いが絶えないところもある。私たちの中にも、遠慮し合ってしまって意見交換ができていない人もいる。これらのような状態になってしまうのは妥協の仕方が分かっていないからである。台湾も中国も摩擦が少しだけみられる。両国も理解し合い、お互い妥協すれば、火花も散ることもなくなると思う。そうすれば、どこの国も、人も、傷つけ合うことはなくなるだろう。

国と国の考え方の違いはあったとしても、若い世代の民間の交流がよりよい発展につながることも多いのではないか。私達も身近なアジアの国々を理解することから一歩を踏み出せたら良いと思う。

若い人達に伝えたい。「とにかく一回、台湾に行ってみよう。世界が広がるから。」

作文部門
優秀賞

洗濯板から始まった私と台湾の人の交流

●高橋　凛々子　東京中華学校 中学2年

私の台湾での最初の衝撃は洗濯板だった。小学1年生の夏休み、初めてイーランへホームステイをした。

ある日、ホームマザーが寝ている私を起こして

「ちょっと下に来て」

まだ寝ぼけている私をむりやりアパートの外へ連れ出した。ホームマザーは私が前日着ていたTシャツをたらいに入れた。横にまな板のような木の板があった。よく見ると桃太郎の昔話で見たことがある洗濯板だった。

「ちょっと見てて。」

ホームマザーは石けんを取り出し、すごく嬉しそうに、私のTシャツをジャコジャコと洗濯板にこすりつけ始めた。

「何をしているんですか？」

そのTシャツは私のお気に入りで、ラメがたくさんついているものだったので、ジャコジャコとして取れてしまうのではないかと心配になった。

「私は今、洗濯しているのよ。これは台湾の伝統的な洗い方だからよく見ておきなさい。」

ホームマザーはニコニコと私にほほえみかけた。

私はその様子をじっと見ていた。どうして私のお気に入りのTシャツが板にこすりつけられているの？ 洗濯ってホームマザーは言ったけど、私にはどう見ても、お気に入りのTシャツがいじめられているようにしか見えなかった。この家には洗濯機がないのだろうか？ わたしのTシャツは破けないだろうか？

ジャコジャコ洗いが終わると、ホームマザーは私のお気に入りのTシャツをバサッバサッとハゲワシが羽を広げるように大きく振ってしわをのばした。そして細いひもに二つに折って掛けた。

その一連の行動を見た私は、あまりにもショックでこの場にいられない気持ちが大きくなった。でも泣かなかった。なぜなら私が泣くとホームマザーが過剰に心配すると思ったからだ。ホームマザーは私が来たことをものすごく歓迎してくれたので、私が喜ぶだろうことをしてくれたのだと今なら思う。だから、洗濯板を見せれば私の勉強になるだろうと考えたのかもしれない。今思うと、洗濯板をホームマザーの家で日常的に使っていたはずはなく、あくまでも私のために用意していたのだろう。

でもこの時の私はホームマザーが大嫌いだった。お気に入りのTシャツが少しほつれてしまったし、他にも嫌なことが結構あった。

今なら分かる。ホームマザーはただただ親切心だけで私を喜ばせようとしてくれたのであり、私をいじめようという気は100％なかったのだ。なぜ100％なかったと言い切れるかと言うと、台湾の人は親切で陽気な人が多いことが分かったからだ。私は洗濯板の衝撃を受けた後もほぼ毎年台湾に行っている。学校でも中華系の友達が多い。そこから学んだのは日本の親切と台湾の親切は少し違うということだ。

例えるなら、日本の親切は「あんみつ」。台湾の親切は「チョコパフェ」。あんみつはうすくて色が地味だし印象が薄い。ところが私が好きなチョコパフェは30cm位で盛付けや飾りが豪華だ。いわゆるSNS映えがする。つまり派手で濃い。

台湾の親切はこのチョコパフェなのだ。派手で濃い親切だから、写真に撮ってSNSを通して人に見せたくなる位印象深いのだ。私の洗濯板の経験がまさにSNS映えだ。

あんみつとパフェはどちらが優れているなんてことはない。どちらもそれぞれの良さがある。だから、日本の親切も台湾の親切もどちらも素晴らしい。でも最初は私の洗濯板の経験のように戸惑うことがある。この戸惑いは最初だけで、何度も台湾の親切に触れるうちになくなってきた。

これが文化の違いを理解するということなのかもしれない。あんみつとチョコパフェを使って親切の違いを説明できたのは、私にとって大発見だ。この大発見を世界中の人に伝えたい。

いや、まずはあんみつとチョコパフェを知っている日本人の友達に話してみようと思う。

作文部門
優秀賞

日台の歴史と未来

●花村　隼　渋谷教育学園幕張中学校 2年

僕には、台湾の文通相手がいる。

事の起こりはこうだ。

母は、出版社で主に中国語辞書の編集をしている。2015年秋、台湾に住む王さんという昭和元年生まれの男性から、会社宛に日本語についての質問の手紙が来た。読んでいる日本語の本にある言葉が、自分が買った日本語辞書には載っていなかったという。

はじめは母と王さんとの間で質問のやりとりが続いていたが、彼からのお礼の品であるお茶の感想を僕が書いた事から、僕と王さんとの文通になっていった。彼は手紙の他に、毎年クリスマスカードや烏龍茶、お菓子を送ってきてくれている。

それまでも母の影響で、僕は台湾にうっすら関心があったが、この文通が僕の台湾への姿勢を決定的に変える事になった。母は昔から台湾が好きで、台湾の事をいろいろと話してくれていた。実は、僕も小学校低学年の時に台湾に連れて行ってもらったのだが、残念ながらほとんど記憶がなく、僕と台湾との関係は薄いものだった。

そんな時に、彼との文通が始まったのだ。

まず驚いた事は、王さんの日本に対する強い好意である。例えば、熊本地震の際、彼は二箱の高山茶と共に手紙にこう書いてくれた。「台北より熊本の皆さんが一日も早く立ち直る様…心よりお祈りします。『ガンバレ熊本!!』」

また、彼は四国や熊本、東京と、何度も日本に旅行に来て、そのたびに日本の土地を褒めてくれる。

こうした気持ちはなぜ起きるんだろうと疑問に思ったが、父の友人である、日本の新聞社の台北支局長だった方のお話を伺えた。

そこで僕は、台湾が1895年から1945年までの間、日本の植民地支配を受けていた事を知ったのだった。

日清戦争での勝利によって日本が台湾を支配し始めた頃、台湾では日本の支配に対する反乱が起きていた。だが、日本にとって台湾は初の植民地である。日本は、後藤新平らエリートを送り込み、一方的な支配ではなく、日本の理想とするような社会をめざし、先進的な社会制度を導入したり、不十分だったインフラを整えたりした。その結果、台湾の生活水準は上がり、先進国に並ぶほどになったという。それによって、日本の支配は次第に受け入れられていった。

日本が第二次世界大戦で敗戦国になると、台湾は国民党の支配下に置かれる。その劣悪な支配で、台湾の人々は日本の支配を美化するようになった。

これが現在の台湾の親日感情の元なのだという。さらには、日本語世代の孫の世代あたりに、彼らから日本統治時代のよい事ばかりを伝えられて育った「哈日族」という人々が生まれた。

それまで僕は、帝国主義の国として数えられていた日本の植民地支配はひどいものだとばかり思っていたが、国家をあげてよい支配をするという姿勢に心底驚いた。

日本最初の植民地になった事、日本の敗戦、国民党の進出という偶然が重なって作られた台湾の歴史は、奇跡そのものだ。

この親日感情は、東日本大震災の際にもはっきり姿を現した。中華民国外交部のサイトによると、2014年末現在での日本への義援金は、政府と民間の金額の合計で約62億9200万元（当時のレートを3.79円/元とすると238億円ほど）で、そのうち民間のものが約54億5400万元（同じく約201億）である。これらの額は同時期のアメリカの義援金にも匹敵する額であり、台湾の人々の日本に対する強い思いを感じる。印象的なのは、民間からの義援金が全体の約86%を占めている事だ。民間からの額の大きさは、台湾の人々の日本に対する「恩返し」とも呼ぶべき感情によるものだろう。

台湾の親日感情の裏にはもう一つの理由が隠されている、と僕は思う。

それは「思いやりの気持ち」である。

台湾在住のある日本人曰く、台湾の友人はみな、外国人も分け隔てなく受け入れて仲良くしてくれるし、過剰なほどの親切心をもって、こちらのやりたい事は徹底的に実現しようとしてくれる。そして、思い立ったらすぐに実行に移す。また、困っている人には手を差し伸べずにはいられない、という国民性もあるらしい。

親に台湾旅行の事を聞いてみたところ、台湾の人たちは、小学生になった僕に鉄道で席を譲ってくれていたという。

こうした親切な国民性が、東日本大震災の時にはっきり表れたといえよう。

これほどまでに日本を愛してくれる人々、国は、他には見つからない。だが、台湾の親日感情の裏にある歴史はあまり知られていないようだ。しかし、王さんのような日本語世代の人々は高齢化が進んで減っていくだろう。そんな中、交友関係を維持し、今以上によくしていくために、表面上の仲ではなく両国共に歴史を理解したうえでの交流が、なお重要になってくると思う。

僕はぜひ台湾に行って、日本語世代の人と話してみたい。そして、日本統治時代の出来事や彼らの認識、次の世代に対する思いを聞いて、多くの人に伝えていきたい。国家間の垣根を越えた人々の友好的な心情を保つため、これは台湾と日本の人々にとって価値がある事だ、そう僕は思う。

作文部門
優秀賞

これからの日台関係

●吉澤　杏梨　愛知県立千種高等学校 3年

沢山のビルの間をビュンビュンと駆け抜けるモーターバイク、道を歩くと香ってくる台湾独特の食べ物の匂い、レンガで造られた可愛らしい見た目の臺中駅、もっと南に行けばたくさん聞こえてくる台湾語、バスの運転手とまるで友達のように仲良く談笑してるおばさんたちは目があうとにっこりと笑いかけてくれる。今旅行先として“流行り”の台湾。しかし私は、SNSにたくさん投稿されている台湾での写真を眺めながら、もっと台湾自身を見て！ と思わず叫びたくなるのである。確かに台湾には美しい景色がたくさんある。けれど、そんなもの表面に過ぎないのではないか。

対して台湾から見た日本は違う。台湾人の多くが日本文化に興味を持っていることもあるが、日本の文化を深く知り、食を知り、日本人を知り、歴史と政治を知る。バラエティ番組にだってよく日本人をみかける。この差は何だろう。日本は統治時代に台湾にたくさん利益をもたらした、いいことをしたんだ。という言葉を、私は正直鵜呑みにできない。本来ならば国はその国に住んでいる人のもののはずなのに、結果的にどんなに利益をもたらしたとしてもそこから権力を奪って統治した事実は変わらないのではないだろうか。にも関わらず、台湾は私たちに歩み寄ってくれている。たくさん台湾人の知人はいるが、未だに私はこの統治時代の話について聞く勇気が持てないでいるのは、嫌な顔をされるのではないかという怖さが心の何処かにあるからだろう。けれど、この歴史から目を背けることは一番してはいけないことだと思う。もっと日本と台湾の関係を良くするためには、このことに関してみんなが考え、そして向き合う必要があると私は思うのだ。

しかし、そんな私も中学一年生以前には全く台湾について何も知らなかった。初めて台湾人にあったのは、私が中学二年生の夏休みニュージーランドの中学校に一ヶ月間通っていた時のことだった。彼女は私と同じ年齢で高雄にある中学校から交換留学生として訪れていた。恥ずかしながらも、当時の私は台湾という国の名前しか知らない。言語はマンダリンを喋るのだと教えてくれた。ニュージーランド人のホストシスターもいる中、彼女は私の一番の喋り相手でお互いの国のこと、言語のこと、かっこいいと思う男の子のことをお互いの第二言語で語り合った。初めての外国人の友達と呼べる相手ができたのはこの時だ。あれから5年ほどの月日が流れ、今では私は台湾にある大学を目指して勉強をしている。きっかけは例の友人ではなかったが、台湾への進学を心に決めた時に彼女の人柄や教えてくれたたくさんの台湾のことがよぎった。そして中国語を通して、台湾の文化を学びいつしか自分と台湾の距離はどんどん近くなっていた。今では何で今まで台湾についてもっと向き合う機会がなかったのだろうと疑問に思う。

台湾は優しい。日本がそれに甘えているというのは、日本人としてとても悲しいことだが、事実否定はできないはずだ。そしてこれは、台湾に関わる多くの日本人が心のどこかで感じたことがあるのではないだろうか。けれど、多くの人が台湾と歩み寄ればその形は変わることができるはず。何事もまずは知る一歩からと言うように、私は大学に入ったらSNSを通じて台湾の文化を発信していきたいと思っている。観光地としてではなく、台湾そのものをすこしでも知ってもらうことができればもっと身近に感じてもらうことができるからだ。SNS上には台湾人が日本人のことを紹介している動画や記事はたくさんある。例えば、日本人の女の子と台湾人の女の子の違いについてだったり、ラーメンの紹介だったり。時には日本人より詳しい時だってある。それらを見ると彼らから見たリアルな日本が見えてきて、確かにその通りだ！と驚くことも多い。私はそんな風に多くの日本の若者に台湾を見せることができたら、未来の台湾と日本の関係に良い影響を与えることができると信じている。台湾は決して夢の島ではなく、日本と同じように実在する、歴史を共有した島なのだ。

そうはいっても今の私はまだ勉強不足で十分な知識はないし、台湾人の意見は聞いたことがないからわからない。もしこの作文が審査を通って研修に行くことができればその機会を使って聞いて見たいなとは思うけれど。しかしそんな私でも言い切れるのは冒頭にあるように、歴史から背を向けることは間違っているということ。私は日本が台湾を統治していたことについて良いとか悪いとかをここで主張しているわけではない。けれど、日本人にはその歴史を知り考える責任があって、その上で今の台湾とも向き合うべきだと思っている。もう台湾には準備ができていて、あとは私たちがこれからどうしていくかということ。日本人の若い世代にそうした問題提起を私はしていこうと思う。そして私も一日本人として台湾と向き合っていくつもりだ。

スピーチ部門
審査委員長特別賞

●大月　陽菜　青稜高等学校 2年

林老師

臺灣，我生活了多年，幾乎是我半個故鄉。在台灣，我遇到很多人，他們都非常的溫柔客氣，對我都很好。也因為有他們，我才可以順利愉快的成長。在我心中，一直有一位特別的人，讓我惦記著。因為我們一起擁有美麗的回憶。

初到我從日本國小轉到臺灣國小的時候，面對陌生的中文功課，壓力很大，父母只好送我到安親班上課。從那天開始，學校結束後，我就得到安親班接受挑戰。

我在安親班認識了很多好朋友和老師。但最特別的是那位會教珠算，改功課還會下廚的補習班老闆 － 林老師。她幾乎像百變超人，一下子是嚴師，一下子又是廚師，照顧著我們的胃。

老師特別喜愛大自然，她覺得有山野的陶冶，我們這群孩子才會變得更健康更懂得人生。暑假的時候，都會安排我們去爬山，雖然爬山的過程很累，但每次登到最高點，看到的山巒風景，就讓人覺得很有成就感。老師不只喜歡爬山也喜歡耕種，假期也會帶我們到宜蘭體驗種菜。記得第一次我們種了600顆高麗菜和1000顆蘿蔔，因為是天然耕種沒有灑農藥，所以蘿蔔一發芽就被小鳥吃光了，最後只有一點點收成。可是高麗菜卻大豐收，老師決定帶我體驗從種菜、收成到販賣的經驗。我們把菜拿到市場去賣，剛開始不知怎麼和客人溝通，但試幾次後，就越來越熟悉，購買的人潮也越來越多。這是一個讓我體驗生活最深的記憶。

我在安親班的四年中，我和老師走了很多地方。從農場到高山，每次都讓我大開眼界，心情非常的快樂，好像每個地方都閃閃發光充滿了驚喜。非常感謝老師，讓我體驗這麼多的人事物，讓我發現許多台灣美麗的風景和人文。四年的日子裡，因為有您，我才能說好中文，因為和您才能打開我的視野。我將來想要成為像老師的大人，然後成為臺灣與日本的橋樑。

謝謝您林老師！

林先生

長年生活し、私にとって第二の故郷ともいえる台湾。私はそこでたくさんの人に出会いました。彼らはみな優しく、礼儀正しく、私にとても良くしてくれました。彼らがいたからこそ私は順調に、そして健やかに成長することができました。私の心の中に、ある特別な人がいて、ずっと忘れずに存在しています。その方と私には美しい思い出があります。

日本の小学校から台湾の小学校に転校した当初、慣れない中国語の宿題に四苦八苦していたので、両親が私を「安親班」に行かせることを決めました。その日から私は放課後に「安親班」に通う生活が始まりました。

「安親班」でたくさんの友人、先生に出会いましたが、私にとって特別な存在は、そろばんや宿題を教えてくれる上に食事も作ってくれる「安親班」の経営者、林先生です。彼女はまるで百の顔を持つスーパーマンのようで、ある時は厳しい教師であり、またある時はコックさんとなって、私たちの胃袋を満足させてくれました。

先生は特に自然が好きで、山野との触れ合いによって、子どもたちはより健康で、より充実した人生を送ることができると思っています。夏休みになると、先生はいつも山登りを計画します。山登りはとても疲れますが、山頂に達して、周りの風景を見渡した時、大きな達成感を得ました。先生は山登りだけではなく畑仕事も好きでした。休日でも私たちを宜蘭まで連れて行き野菜作りを体験させてくれました。初めて行った時は、キャベツの種を600粒、大根の種を1000粒蒔きました。無農薬の自然栽培だったので、大根は芽が出た途端に鳥に食べられてしまったので、わずかしか収穫ができませんでした。しかし、キャベツは大豊作でした。先生は我々に野菜作り、収穫から市場での販売までを経験させると決めました。収穫した野菜を持って市場に行きましたが、最初はお客さんとどうコミュニケーションを取っていいのか分かりませんでした。しかし、何度か試すうちにだんだんと慣れ、買ってくれる人が増えていきました。これは私にとって思い出深い出来事です。

「安親班」に在籍した四年間、私は先生と共にたくさんの場所に行きました。農場から高山まで、いつも私の視野を広げ、とても愉快な気持ちにさせてくれました。またどの場所もきらきらと輝き、喜びと驚きに満ちているようでした。私に多くのことを体験させてくれ、そしてたくさんの台湾の美しい風景、文化を教えてくれて、先生にはとても感謝しています。この四年間、あなたのお陰で、中国語がうまく話せるようになり、そして自分の視野を広げることができました。私は将来あなたのような人になって、台湾と日本との架橋となりたいです。ありがとうございました。林先生‼

スピーチ部門
優秀賞

●小川 晃司 アンジェロ　聖学院高等学校 3年

要不要考慮台灣的大學呢？

在真正認識中文之前，我對這個語言與文化沒有太多的概念，印象中就像是一堆艱難的漢字搭配著獨特的發音。所以，我一直無法想像如何用中文表達出外國的專有名詞。但出乎我意料之外的是，有一天中文也成為了我生活裡不可或缺的一部分。

會開始接觸中文是因為有一天我在學校向老師諮詢大學的資訊，老師推薦我不妨去台灣留學看看。經過一段時間深思熟慮後，我便決定去台灣留學，因為在台灣的大學可以讓我一邊學習中文，一邊學習專業知識。從做完決定後，中文在我求學的生涯中扮演了十分重要的角色，也帶給我許多寶貴的經驗。

學習中文的過程中，有新鮮、有熟悉，也有著許多困難和挫折。特別是中文的發音與文字對我來說是既熟悉又陌生。因父母的關係我擁有兩種母語 — 日文和法文，在日文裡有許多漢字，這讓我在學習中文的過程中能快速理解中文字的意思與構造。而雖然對中文的聲調很陌生，但在法文裡卻有著與中文類似發音的字，例如：中文母音的「ü」跟法文的「u」是一樣的，「an」「ang」也不難分辨。這些相似之處，讓我對中文有了一份親近的感受。

然而，日文的文法與中文的文法很不一樣，例如：動詞的擺放位置、句型的順序等都需要花時間練習和消化。還有專有名詞的表達也容易讓我迷惑，舉例來說「NewYork」是「紐約」，若只看漢字我便無法得知它是什麼意思。但從中文的語言裡卻能感受到中華文化，尤其是成語。每個成語都蘊含著它自己的故事與由來，我感到非常有趣。

讀書時，學習英文是必要的，對於許多學生來說，認真學習英文是為了得到好的成績，但對我而言，學習語言是希望擁有不同的生活技能，就像是騎腳車一樣，人不一定要學會騎腳踏車，但若學會了便可以到達更多地方、欣賞更多不同的風景。我希望學習語言這件事能帶著我去世界各個角落、認識各種文化、接觸更多有趣的人。今年我就要去台灣留學了，我相信在台灣留學的點點滴滴會是我人生中十分寶貴的經驗，也能讓我大開眼界更加成長，因此我很期待。

「台湾の大学はいかがですか」からの私

本物の中国語に出会う前、私はこの言語と文化に対してあまりイメージがなく、難しい漢字の並びにそれぞれの独特の発音があるという印象でした。ですので、私は中国語でどのように外来語を表現しているのか想像がつきませんでした。しかし、私の予想外なことに、中国語は私の生活において欠かせないものとなりました。

私が中国語に触れることになったのは、ある日私が先生に大学の進路について尋ねに行った時に、先生に台湾に留学しに行ってみてはどうかと勧められたのがきっかけでした。一定の期間考慮した後、私は台湾に留学しに行くことに決めました。なぜなら、私は台湾の大学で中国語を学ぶとともに、専門的な知識を学ぶことができるからです。決断した後、中国語は私の生涯においてとても重要な役割を果たし、多くの貴重な経験をもたらしてくれました。

中国語を学習過程において、新鮮なこと、身近なこと、また多くの困難や挫折がありました。特に、中国語の発音と文字は私にとって身近でもあり見慣れないものでした。両親の関係で私は母語二つがあります。それは日本語とフランス語で、日本語ではたくさんの漢字があるため、中国語の文字の意味と構造の理解を早めてくれました。また、中国語の声調は慣れないものがありますが、フランス語では中国語と似ている発音があります。例として、中国語の母音である「ü」とフランス語の「u」は同じですし、「an」「ang」も区別しやすいです。これらの類似点は、私と中国語をより身近に感じさせてくれるものとなりました。

しかし、日本語の文法と中国語の文法は同じではありません。例えば、動詞の位置や文型の順序など練習して身につけるには多くの時間がかかります。また、固有名詞の表現も簡単に私を惑わせます。例えば「New York」は「紐約」ですので、漢字だけを見るとそれがどういう意味なのか知りえません。ですが、中国語という言語、特に成語から中華文化を感じ取ることができます。すべての成語にはそれぞれの物語と由来が含まれていて、とても興味深く感じました。

勉強する時、英語は必要ですが、多くの学生にとっては良い成績を得るために真面目に英語を学習するものだそうです。しかし私にとっては、言語を学習するということは自転車に乗ることと同じように、違ったライフスキルを望んでいます。人は必ずしも自転車に乗ることを学ばなくてもいいですが、乗ることができれば多くの場所に行くことができ、違った風景を楽しむことができます。私は言語を学ぶことで世界の様々な場所に行き、いろいろな文化に触れ、多くの面白い人に出会わせて欲しいと思います。私は今年台湾に行きます。台湾での留学で徐々に人生の貴重な経験になり、視野を広げさせ、成長させてくれるものであると信じ、とても期待しています。

スピーチ部門
優秀賞

●櫻井 萌子　宇都宮大学 4年

關於台灣思考

大家好，我是櫻井萌子。大學三年級時，我前往台灣的大學留學了一年。留學時，我修習了幾門課程。今天我想介紹那時候所學習，體驗與感受到的心得。

首先，我選修了介紹關於各民族的歌曲的課。老師每個禮拜會介紹各種民族的歌，並且進行分析，再讓大家一起唱看看那些歌曲。有一天課堂的內容是介紹客家民族的歌曲，在老師介紹與分析完，又到了大家一起合唱的環節時，老師詢問同學有沒有人是客家人，而台下也有兩三個同學舉手答是，並且示範了幾首客家歌給我們聽。另一天，介紹阿美族的歌的時，老師又向我們詢問是否有同學中有人是阿美族人。

這一連串的對話讓我很驚訝。老師問有沒有什麼什麼人，而學生也回答自己是屬於什麼民族，這好像是向別人表明自己是「不一樣」似地，而我想在日本這樣的事情很罕見。不如說，在日本，去強調自己跟別人「不一樣」反而不是件好事吧？除了那堂課之外，我也發現過類似這樣事情的樣子不少次。在結束了留學，歸國生活之後，我也逐漸注意到自己看事情的角度有所偏異。

前往台灣留學之前，作為準備我曾經讀了一些關於台灣歷史的書籍。那個時候，對於台灣的歷史，我感到真是「既複雜又困難」。接著透過留學，我嘗試捉模台灣的「特徵」。但是，在台灣的生活當中，我反而越來越不知道了自己思考的問題的答案，就這樣結束了留學生活。

回國之後，我開始思考為什麼我是日本人。是因為會講日文嗎？是因為住在日本嗎？在思考這個問題的過程中，我反而開始懷疑起尋找作為日本人的條件的自己。最後，我才發現了自己經常以爲看待事情只有一種角度，而自己的想法狹隘又偏重於某個面向。

我認為，在思考關於台灣時，像當時在留學中我所想的那樣，以思考「特徵」的角度是行不通的。思考台灣的事情時，也許需要的是更寬廣的角度與價值觀。雖然我現在仍無法斷定「更寬廣的角度」到底是什麼，但是我不會放棄，會持續精進與努力。

我的演講到此結束，謝謝大家。

台湾を考えること

皆さんこんにちは。櫻井萌子と申します。大学3年生の9月から私は台湾のある大学に約1年間留学していました。大学では、いくつか授業を受けました。そこでの体験を通し感じたことを紹介したいと思います。

私は、各民族の歌声に関する授業を受けていました。その授業は世界中の民族の歌を取り上げ、分析し、実際に自分たちでも歌ってみるという授業でした。毎週、様々な民族の歌が紹介される中、ある回で客家の歌が取り上げられました。客家の歌について一通り説明がされた後、いつものように歌を歌うことになりました。教授は客家人がいるかどうかわたしたちに尋ねました。2、3人が手を挙げ自分は客家人であると名乗り、私たちに客家の歌を披露しました。また別の日、アミ族の歌が取り上げられた際にも、教授はアミ族がいるかどうか尋ねました。

私はこの一連のやり取りに驚きました。教授が○○人はいるかどうかと聞いたり、生徒がそれに答え、自分を○○人だと紹介する。自分は他人とは「違う」存在であると言う。このような光景は日本ではなかなか見られないと思います。むしろ、日本では、他人と「違う」ということを強調することはあまりよく思われないのではないでしょうか。この授業以外にも、私は台湾の留学生活の中で何度か似たような光景を目にしました。それから日本に帰国し、生活していくうちに自分の偏った視点に気付きました。

台湾に留学する前、準備として台湾の歴史について本を読んで少し勉強しました。その時私は台湾の歴史について「複雑で難しい」と感じました。それから留学を通して、台湾はどのような場所であるか、「特徴」のようなものをなんとかしてつかもうとしました。しかし、台湾で生活していく中で、自分の考えていることについてどんどんわからなくなっていき、そのまま留学を終えました。

日本に帰国し、なぜ自分が日本人であるのかについて考えました。日本語を話せるから？ 日本に住んでいるから？ 考えているうちに、日本人であるための「条件」を探している自分の考え方そのものに疑問を抱くようになりました。そして、自分の考え方が、ある面でしかものが見れていないような、狭く、偏ったものであることに気付きました。

台湾について考える時、留学中に私が考えていたような「特徴」を求める視点では通用せず、もっと広い視点で台湾を見る必要があると感じました。その「広い視点」がどういうものか今はまだわかりませんが、台湾についてわからないと放棄するのではなく、考え続けていきたいと思っています。

私のスピーチはこれで終わりです。ありがとうございました。

スピーチ部門
優秀賞

●山崎 七菜　文教大学付属高等学校 3年

課本上沒教的發音

前陣子到台灣旅行時，被好多人問「你學的是台灣的發音嗎？」「你的老師是台灣人，對不對？」。沒錯！我正在學中文，我的中文老師是從台灣來的。不過，我很好奇大陸人說的普通話跟其他華人國家比起來，差別真的那麼大嗎？於是我針對不同的發音和說話習慣做了一點研究，今天就和大家分享分享。

首先，台灣人喜歡用「啊、吧、啦」等等的語助詞。這種語助詞讓對話變得溫暖。尤其是句子後面加上了「唷、欸、喔」會讓人有可愛的印象。

第二，在台灣常常聽到一些「連音」。比如說，把「這樣子」說成「醬子」，「那樣子」說成「釀子」，「你知道嗎？」變成「你zao嗎？」、「不好意思」變成「bao is」。 第三，跟大陸比起來，台灣人較少說「兒」。因此，在台灣不說「一點兒」「哪兒」而是說「一點點」「哪裡」。雖然被大陸人說我的兒說得不漂亮讓我曾經很失落，但我並不在意，因為我學的是台灣華語，不必特別改成北京腔。

此外，台灣不同族群有不同的語言，許多人不但能說中文，也能說方言。據我調查，有三分之二的台灣人會說「台語」，常常會聽到「li hou」「duo xia」。另外還有分布在桃園、新竹、苗栗等地的「客家話」。雖然日本也是島嶼國家，各地也有不同的口音和獨特的用語，但說的還是日語，不像台灣這麼多元。

透過研究語言的變化，不但可以瞭解一個國家的歷史，也可以知道現在社會的現況。我很好奇，當我變老的時候，大家說的中文還跟現在一樣嗎？這些都是課本上學不到的事，只有去台灣才能更了解。俗話說「讀萬卷書，不如行萬里路」我很期待今後在台灣的生活！

以上是我的演講，謝謝大家。

教科書は教えてくれない中国語

先日台湾旅行に行った際、何度もこう言われました、「あなたの発音は台湾人だね」「先生は台湾人でしょ？」その通り！私は現在中国語を習っています。そして、私の教わっている先生方は皆台湾出身です。しかし、現地の人にとっては、台湾の中国語は大陸の中国語とそんなに大きな差があるのでしょうか？ そこで、今日は台湾の訛りや日常用語の差異について発見したこと、私自身の体験を皆さんに共有したいと思います。

一つ目は、台湾人は「啊、吧、啦」などの語気助詞を使うことが多いです。これらの助詞は話し方が優しい印象を受けます。特に「唷、欸、喔」の助詞の語尾につけると可愛いです。二つ目は、台湾では日常的に、つなぎ言葉を使います。台湾人との会話で、よく「這樣子」「那樣子」を「醬子」「釀子」と省略するのを耳にします。他には「你知道嗎？」が「你zao嗎？」、「不好意思」が「baois」になっているように聞こえます。三つ目は、台湾人はあまり「兒」の発音を使いません。例えば、「一點兒」「哪兒」を「一點點」「那裡」と言うように。私は以前中国人の知り合いと会話していた際に、「兒」の発音があまり上手ではないと言われたことがあり、その当時はとても落ち込みました。ですが、今はあまり気にしてはいません。何故なら私が勉強しているは台湾の中国語であり、あえて北京の発音に寄せる必要はないからです。

また、台湾にはいくつかの民族が存在し、彼らは独自の言語を使います。ですので、多くの台湾人が標準語だけではなく、その土地それぞれの言語も話すことができます。私が調べたところによると、三分の二の台湾人が台湾語を話すことができるそうです。例えばよく耳にする、「你好（li hou）」「多謝（de xia）」などはその台湾語です。他にも、桃園、新竹、苗栗では客家語が話されています。日本もまた、台湾のような島国であり、各地には様々な方言や独自の言葉が存在しますが、やはり、台湾のように一つの国でありながら全く違う言語であるとは言えないでしょう。

このように訛りや方言の差異から、台湾という一つの国の歴史を知り、また近年の台湾社会の変化を少し垣間見ることができました。私たちが今話している中国語は、10年後、20年後に果たして今の形からどれほど変化しているのでしょうか？ これら日常用語の違いは教科書では学べません。現地に行ってこそ初めて発見できるのです。

『多くの本を読むより、多くの道を歩いた方がいい（讀萬卷書不如行萬里路）』

この言葉にあるように、私はこの先、台湾で生活することが楽しみで仕方ありません。

スピーチ部門
優秀賞

●横田 真桜　横浜中華学院 高校2年

臺灣留學感想

我從小一到現在，一直在橫濱中華學院就讀，所以對我來說臺灣是我最親近的國家。前年十月，我到了臺灣留學。在私立長榮高級中學讀了九個月。那是個重視英文、日文等外語的班級，大家都很熱情，對我也十分友善。

我住在學校附近的宿舍，放假時我常常去騎著腳踏車，乘風蹓躂蹓躂臺南的觀光景點和名勝古蹟。那時我深深感受到臺南濃厚的歷史氣氛，例如：在赤崁樓我們可以看到荷治時代的古蹟，和臺灣英雄鄭成功的雕像；在林百貨裡保留著日治時期的痕跡，屋頂上還有一座神社可以參拜；走在市場，臺南的道地小吃琳瑯滿目，陣陣香味撲鼻而來，讓我忍不住停下腳步；走在神農街上，流連在可愛的雜貨店和時尚的咖啡廳，享受現代臺灣特有的宜人氣氛；這些都是我高中留學生涯中非常難忘的回憶。

我決定去留學的理由有三點：第一，想加強自己的中文能力。因為去留學的話一定可以學到實用的中文。第二，想挑戰獨自一個人的冒險。從小到大我一直在日本生活，如果有一天到了一個陌生的環境，到底可以用中文完成哪些事情呢？第三，想親自深入體驗臺灣的文化，這個跟自己緣分很深厚的國家。透過這次的留學，幫助我實現了這些夢想，更讓我發現自己全新的一面，拓展了自己所感興趣的領域。感謝父母及學校的老師們賜給我這段寶貴的機會與經驗。

在臺灣我交到了許多好朋友，到今日都還保持著連絡，我們會彼此祝賀佳節愉快，或是互寄卡片等等。這段留學期間最珍貴的財富，便是結交到這群跨越國界的朋友們。我喜歡臺灣也愛我的祖國日本，希望兩國人民也能保持良善的交流，珍惜世代累積的緣分。

台湾留学して感じたこと

小学1年生から横浜中華学院に通っていることもあり、台湾は私にとって非常に近しい国でした。一昨年の10月から私は台湾に留学し、約9ヶ月間私立長栄高校で学びました。英語や日本語など外国語を重視するクラスで、皆優しく、フレンドリーに接してくれました。

留学先では、私は学校近くの寮に一人暮らししていました。休みの日はよく自転車に乗って、観光地を巡りました。その時、私は台南の悠久の歴史を感じました。例えば、赤嵌楼では台南のオランダ統治時代の遺跡や英雄鄭成功の銅像を目にしました。林百貨では、そこに残った日本統治時代の痕跡を眺め、屋上の神社を参拝しました。老街を歩いた時には、美味しそうな小吃に目を奪われて思わず足を止めたり、神農街では、可愛い雑貨店やオシャレなカフェに入って現代台湾の素敵な文化を感じました。このような留学中に行った様々な場所のすべては、私の素晴らしい思い出です。

私が台湾に留学した目的は３つあります。１つめは、中国語の強化です。留学すれば実用的な中国語が学べると思ったからです。２つめは、1人での冒険に挑戦してみたかったからです。ずっと日本で暮らしていた私は、全く知らない土地に行ったら、中国語だけを使ってどのようなことを成し遂げられるのか、とても気になりました。３つめは、自ら台湾に行くことで子供の頃からとても縁のあるこの国をもっと知りたいと思ったからです。今回、留学を通してこれらの夢を叶えることができました。また、新しい物事との出会い、自分の全く新しい面を知ったり、自分の興味のある分野を再発見したりすることもできました。この留学へ行かせてくれた学校の先生方と両親に感謝します。

台湾で出来た友人とは、今でも連絡を取り合っています。季節のイベントを互いに祝ったり、カードを送りあいます。私は、留学して得た1番の財産はこの国境を越えた友達だと思っています。私は台湾が大好きです。祖国である日本のことも大好きです。だから、日台両国の人々がこれからも昔からの縁を大切にし、手を取り合って未来へ進んでいくことを願っています。

台湾研修旅行を終えて

研修旅行に参加した受賞者に、旅行の感想と、ホームステイ先で撮った写真に一言メッセージを添えて送っていただきました。

加藤　遼　明治大学付属明治中学校 1年

今回、日台文化交流青少年スカラシップ研修旅行に参加して、沢山の方と交流し、沢山の事を経験し学ぶことが出来ました。

三年振りに訪れた台湾はとても懐かしく、台湾の人々は三年前と変わらずにとても暖かく親切で、自分の故郷に帰ったような気持ちになりました。

一年生から四年生まで通っていた台北日本人学校では台湾の歴史や地理を学ぶ時間がありました。僕はそこで学んだ八田與一がつくった烏山頭ダムを実際に見に行く事が出来てとても感激しました。八田與一が台湾の発展の為に命がけで造ったダムはとても大きく美しく今でも台湾の人々の役に立っていました。僕もいつか台湾と日本の為になる仕事をしたいと強く思いました。

ホームスティ先ではお父さんお母さんがとても親切にしてくれ、持ちきれない程のお土産をボストンバックいっぱいに詰めてくれました。お兄ちゃんは日本語がとても上手で日本に関心を持ち一生懸命日本と日本語について勉強していました。それに対して僕は六年も台湾に住んでいたのに、帰国して三年で中国語をすっかり忘れてしまい、とても恥ずかしい気持ちになりました。次に再会した時までに中国語で会話が出来るようにもう一度勉強しようと思いました。

今回このような貴重な機会を与えて下さったすべての皆様に感謝しています。

本当にありがとうございました。

1日でしたが交流を深めることが出来ました。
これからもSNSで連絡しあって行きたいです。

横田　真桜　横浜中華学院 高校2年

今回の研修旅行を通じて、台湾のことを更に知ることができた。私はこの研修旅行のことを一生忘れないだろうと思う。

まず、2日目の総統府、外交部、教育部への訪問では、日台交流や人材育成にかける熱い思いを聞いた。また、台湾歌壇の方々には日本統治時代や戦後の貴重なお話をしていただいた。4日目には延平中学で現地の学生と交流し、その後1泊ホームステイをした。どちらも短い時間の滞在であったが、楽しく過ごした。

私は旅行で5回程度と、8ヶ月の台南留学をしたことがあった。そんな私にとって、台湾は半分故郷のようなものである。しかし、歴史や現地の人の思いなど、まだまだ知らないことが沢山あることを痛感した。台湾を支えていける人材になりたいと思っている。今後は、その方法を模索していきたい。

最後に、私は謝辞を表したい。非常に充実した6日間を過ごすことが出来たのは、団員の皆と、JTB、産経新聞社の方々のおかげである。私はこの不思議な縁を大切に、いつか日台の架け橋になりたい。

夕食前に大安森林公園前にて

岸　ふみ　長崎県立諫早高等学校附属中学校 2年

“台湾に行きたい”そんな気持ちで台湾について調べた冬休み、本当に参加できるなんて考えもしませんでした。

研修の中で、台湾の人々と直接触れ合えたことが印象に残っています。日本語世代の方との交流では、聞きたかった「植民地にされていたのになぜ親日的なのか」を聞くことができました。また、私の祖父母よりも高齢なのにとても元気な姿に驚きました。

学校訪問では学生達の英語能力の高さに圧倒され、“英語は得意”と思っていた自分がとても恥ずかしくなりました。

“見れるもの全部見て視野を広げて帰ってこよう”と臨んだこの研修。私の視野は何十倍にも広がりました。この経験を周りの人々に伝えていくとともに、これからの日台の懸け橋になれるよう努力していきたいと思います。

6日間をより濃いものにしてくれたメンバー達、主催者の皆様、そして台湾で出会った全ての方々に感謝致します。私が中国語を話せるようになってまたお会いしましょう!

Jennyといれて最高でした!
中国語を話せるようになってまた会いたいと思います。

花村　隼　渋谷教育学園幕張中学校 2年

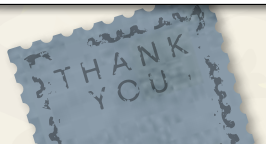
今回の研修旅行では、政府機関の訪問をはじめ個人旅行ではまずできないさまざまな貴重な経験ができた。

その中でも特に心に残ったのが日本語族の方々と話したことだった。台湾歌壇との夕食では、次の世代である若い方と同席した。その方は句集を読んだことが歌壇に入るきっかけになったといい、日本のアニメに興味を持っている。そして友愛グループ、台湾歌壇の両方に在籍する日本語教師の黄さんには、戦争への意見や日本統治時代の経験について聞くことができた。さらに、二年前から文通をしている日本語族である王さんとも個人的にお目にかかれ、王さんたち数十年前に日本語の教育を受けた方々の日本に対する愛や関心を感じた。そしてそれは若い世代にも影響を与えている。

これらの経験を活かして今後どのようなことができるか考えていこうと思う。

共にこの旅行に参加した団員及び関係者の方々には本当に感謝している。またどこかで再会できるよう願っている。

朝早くMRTに乗せてくれてありがとう!
一晩だけだったけれど楽しかったです!



Homestay Report

高橋　凛々子　東京中華学校 中学 2年

まず初めに第16回日台文化交流青少年スカラシップを企画して下さった関係者の皆様に感謝したい。

今回の旅行では沢山の烏山頭ダムなどの歴史的名所を訪れたり、普段はお会いできない台湾外交部、教育部並びに副総統への表敬訪問、延平中学訪問、ホームステイなどとても貴重かつ有意義な体験ができた。そして、私がこの旅行で最も楽しみにしていたのは台湾歌壇や友愛会の皆さんとのお食事会だ。

私は台湾は日本に統治されたという暗い過去があるにも関わらず台湾には親日の方がすごく多い。なぜ反日ではなく親日なのか？その疑問についてある日の夕食会で質問してみると予想もできない答えが返ってきた。「確かに嫌だと思ったこともあったけど、清の時代よりも遥かにいい環境の台湾にしてくれたことに今でも感謝している。」こう仰った方がいた。その言葉を聞いて深く感動したのを覚えている。

最後に私の作文を選んで下さった審査員の皆様、愉快で優秀な団員達、JTBの添乗員の方々、本当にありがとうございました。

とても楽しかったです！
沢山美味しいもを食べさせてもらいました。深夜に二人で串カツを食べながら外出したのは良い思い出です。

山崎　七菜　文教大学付属高等学校 3年

この研修旅行は様々な出会いがありました。
日本語世代の方々は戦争の体験と統治時代のことを話してくださりました。その当時日本の日本をどう思っていたのか、その後の生活についてなどを直接耳にして、現在も続いている日台関係を途絶えさせてはいけないと感じました。この先、その関係の継続に一役買える人材に私もなれたらと思います。

延平中学訪問とホームステイは、この旅行の中で一番楽しい時間でした。台湾は5回目だとバディの子に伝えると、最近流行りのカフェやローカルな屋台巡りに連れて行ってくれ、訪れたところどれも新鮮でした。

そしてなにより、6日間を一緒に旅した皆さんにはお世話になりました。台湾の印象、そこから見た日本、民族や習慣の違いなど、討論会での皆さんの意見には自身で気づけなかった発見がたくさんあり、私にも得るものがありました。

この度はこれらの素敵な出会いの機会を与えてくださり、ありがとうございました。

部屋にはいっぱいのお土産、市内探索中はずっとご飯ごちそうしていただいて、台湾人のウェルカム精神をひたすら感じました。

橋本　真那　文教大学付属高等学校 3年

この6日間、日台文化交流のために何ができるか、という問いに向き合ってきました。そして様々な方々との交流させて頂く中で、その答えに繋がるヒントがお一人お一人の言葉に隠されているようでした。

中でも日本語世代の友愛グループや台湾歌壇の皆さんとの交流は、貴重なものとなりました。日本人以上に日本の文化を知り、愛し、その美しさを継承しようと努力されている姿に圧倒されると共に、自身の無知を思い知らされました。台湾は「伝統を守りつつ、進化する国」だと聞いたことがありますが、まさにその通りです。

まずは日本人として日本について知っておくべきことが沢山あると感じました。そして日台の歴史関係についても、より学びを深める必要があると思いました。この問いの正解は、ないと思います。しかしながらどのような形であれ、将来日台文化交流に良い影響を与えられるよう、前に進んでいきたいと思っております。ありがとうございました。

ずっと話してましたが話足りないほど、とても充実した一晩でした。

今井　大貴　明治学院大学 1年

今回の台湾研修旅行を通して、台湾と日本の深い関係、自分自身を見つめ直す良い機会となった。特にこの研修旅行で印象に残っているのは台南にある烏山頭ダム、八田興一記念館、台湾歌壇、友愛グループとの交流の2つである。

烏山頭ダムの見学は今回が二度目であったが、また違った視点からダムを見学することができた。50年間にわたる日本統治時代、華南平野の大規模なインフラ設備に力を尽くした一人の日本人の男を私は日本人として誇りに思った。太平洋戦争が勃発しアメリカ海軍によって命を奪われ56歳という短い生涯を終えることとなった。八田興一の後を追うように妻（外代樹）も子供を残し投身自殺を図った。なぜ、自殺に追い込まれることになってしまったのか具体的な理由は明らかになっていない。台湾に多くの功績を残しながら不遇の死を遂げた八田夫妻であったが、彼の偉大な功績は後世に受け継がれていくことであろうと感じた。

台湾歌壇、友愛グループの方との交流では、正直何を話したらよいのだろうというのが率直な気持ちであった。日本統治時代の話をしてよいのかはじめは戸惑いもあったが快く話してくれた。当時、日本人として日本語教育を受け、ある日を境に台湾人として台湾語の教育を受けることになった当時の人の精神的負担は計り知れない。今でも定期的に日本語を使っている姿にとても感銘を受けた。

研修旅行を通して貴重な経験をすることができた。日本と台湾の関係についてより深く知ることができ、また自分の将来についても見直すことができた。この経験を糧に今後の人生を歩んでいきたい。

今回の台湾研修旅行でホームステイを初めて経験することができた。ホームステイ先に行くまでは、楽しみよりも不安の方が大きかったが、ホームステイ先のご家族の方々が温かく迎えてくれたためすぐに馴染むことができた。一泊のみのホームステイで短い時間であったが、ホームステイ先の母が手料理を振舞ってくれたため台湾の家庭料理を楽しむことができた。

Homestay Report

大月　陽菜　青稜高等学校 2年

私は台湾に長く住んでいたため、台湾内の有名な観光地には一通り行ったことがあります。しかし、今回の研修では、今まで出会ったことのない新しい台湾を発見することができました。

総統府は外から眺めたことはありましたが、実際に中に入ったのは初めての経験でした。中は想像してたようにとても綺麗でした。そしてテレビでした見たことのない陳副総統と握手をして言葉を交わす機会を得ることができました。陳副総統から「こんにちは」と話しかけられ、とても感慨深かったです。

また教育部の見学では、台湾の文化を大切にするという考えの下、台湾語や台湾の歴史を重視した授業カリキュラムを作成していることを知りました。これも普通の観光旅行では知りえない経験でした。

新幹線で行った台南市では、韓国にしかないと思っていた慰安婦像に衝撃を受け、ホームステイした詹さんご家族の暖かさに触れることができました。こうしたさまざまな貴重な体験は、高校生活のいい思い出となりました。機会を与えてくださった皆様に深く感謝いたします。

ご飯を食べる時わざわざ私の行きたい所調べてくれたり、映画の趣味があったのでそれについて沢山話せて嬉しかったです。

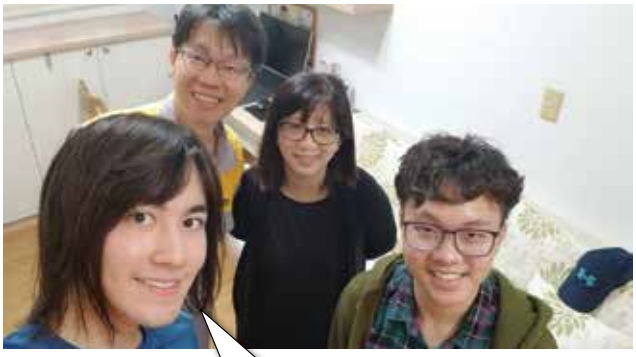
小川　晃司　アンジェロ　聖学院高等学校 3年

この研修旅行の存在についてだけは2人のOBや先生から聞いたということで応募したことがきっかけでした。そして、このプログラムの内容は私の想像を超えたものであり、これから台湾へ留学する私にとっては素晴らしすぎる研修旅行となりました。

まず総統府や教育部などにて表敬訪問した際は挨拶ができたということだけではなく、私が興味のある分野に関する質問を直接できたということを光栄に思いました。

また、ホームステイでは現地の高校生と密に関わることはなかなかできることではなく、自分の中国語能力を初めて自分とほぼ同世代に台湾人を相手に使うことができました。そこでは台湾人の高校生までの教育システム及び現在の彼らから見た教育事情や社会問題、日本のイメージなどを生の声で聞くことができました。

最後に、今回の旅行の仲間との出会いを大切にしながら過ごしたいです。このような普通は決してできない6日間を過ごせたことを感謝しています。



お互いに中国語と日本語、そして文化への認識を伝え合いました。

纐纈　栄美子　東京都立豊多摩高等学校 1年

今回の研修旅行は、私にとって思ってもみない転機となりました。

台湾での経験で印象に残っていることは、ホームステイです。私は台湾語も英語もしゃべれなかったので、翻訳アプリを使ってしゃべることしか出来ませんでした。それが、とても悔しかったです。もっと台湾語が出来たらと、後悔しました。

このとき言葉は大切だと感じました。ボディーランゲージや翻訳アプリを使えば、コミュニケーションはとれますが、正確に、かつ素早く伝えられるのは、やはり自分自身の言葉だと感じました。次に台湾に行った時、台湾語でコミュニケーションをとれるように勉強したいと思いました。父からはアメリカ留学を勧められていますが、台湾語を学べば、台湾にも留学が出来て、視野が広がると思いました。

今回の研修旅行でさまざまなことを学び、多くの人と交流をもつことが出来ました。この貴重な経験は、私の将来に大きく影響を与えることになると思います。

日本のアニメや音楽の話が出来て、楽しかったです！ 本当にありがとう！

櫻井　萌子　宇都宮大学 4年

今回の台湾研修で最も印象に残ったのは、東呉大学の学生との討論会、ホームステイです。この時に私は自分が台湾に対して抱いていた疑問点である、「台湾人の『多様性』に対する考え方」について問いました。バディは私の質問に丁寧に答えてくれました。彼女から新たな視点を得ただけでなく、『多様性』に対する感じ方の違いを直接肌で感じることができたように思います。台湾人と直接このような討論をする機会は少ないと思います。今回彼女から得た新たな学びを忘れず、さらに考え続けていきたいと思いました。

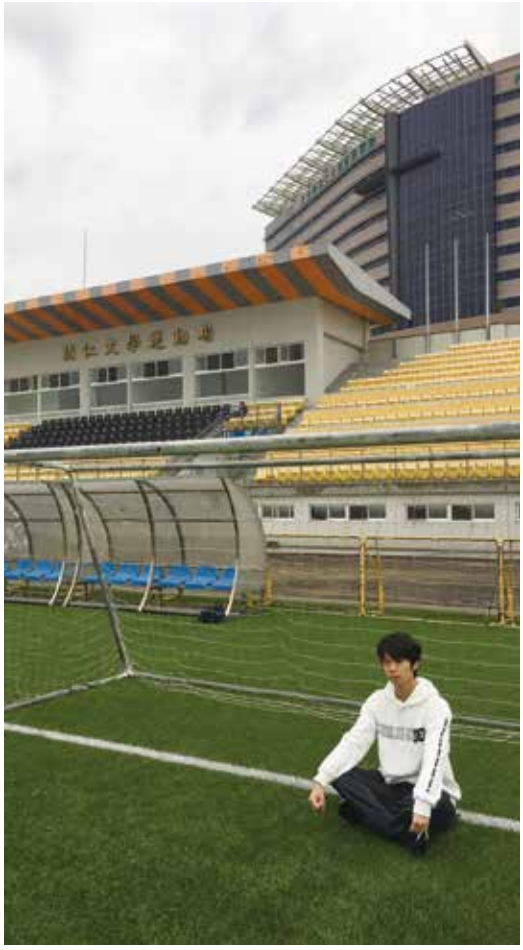
この6日間を共にした団員には多くの刺激をいただきました。年齢や出身地が全く違う団員と、台湾に対するそれぞれの関心を共有し、新鮮だったり若かったり、新たな学びを得たりと色々考えさせられました。5日目には、台湾で見聞きしたことを団員同士で討論しあいました。当たり前なのかもしれませんが、台湾、日本、日台の友好について1人ではなく、皆が一緒になって考える大切さを改めて感じました。日本でも今回の経験を共有し日台の友好について考え続けていきたいと思います。ありがとうございました。

バディやバディの家族と趣味や将来の話など話しあえました。貴重な体験でした。

OB・OGからのメッセージ

Message

これまで200名を超える受賞者の青少年が台湾を訪問し、
その後も日台の友好を築いています。



寺田　佳以　●第15回作文部門

第16回日台交流スカラシップ受賞者の皆様、この度は受賞誠におめでとうございます。

私たちは「台湾」という共通項で集まった仲間です。これから受賞者の皆様が、自分ならではの角度から、日本と台湾の交流に少しでも関わっていってほしいと思います。

私は前年、この台湾研修旅行に参加させていただきましたが、普通の旅行ではまず赴くことのできない場所へ連れていっていただき、貴重な経験の経験を得ることができました。私の人生の中でも、大きなターニングポイントとなりました。各場所で過ごした時間・感じたこと・思い出の数々は、僕にとってかけがえのない財産です。

私は現在、国立彰化師範大学に正規留学しています。将来は台湾サッカー界発展のお手伝いができればと考えております。縁あって、最近現地の幼稚園児・小学生のサッカー指導をさせていただく機会を得ました。サッカー界にどの面からかかわっていきたいかや教え導く難しさを日々感じ、頭を悩ませておりますが、現地の知り合いや大学の友人たちが常にサポートしてくれます。台湾に対する感謝は日々募るばかりです。

スカラシップに参加していなかったら、自分は今のように、未来を意識しながら行動することはなかったのかなと思います。受賞者の皆様にとっても、何か１つのきっかけとなっていることを願っています。

浅野　華　●第14回作文部門

私は2年前、第14回研修旅行に参加させていただきました。

台湾の歴史や政治、文化に触れることができたこの貴重な経験は、自分の人生の大切なパズルのピースだと思います。現在、私は国立政治大学に留学しています。実際に台湾政治を現地で観察できるだけでなく、世界各地の学生と台湾について中国語や英語で討論することで日々新たな知見を得ることができ、刺激を受けています。そして、留学を通じ、台湾に連なる輪を、日台を柱に、世界へとつながる大きな『えん』へと広げていきたいと考えるようになりました。日台スカラシップの経験が留学という決断につながり、さらにこの留学によって次の段階へつながっていくのだと感じています。

この日台スカラシップは沢山の方々の支え無くしては実現し得ないものです。その恩返しができるよう、私達一人ひとりがこの輪を広げ、日本と台湾、そして世界の新たな時代を作っていければと思います。

「第16回日台文化交流青少年スカラシップ」おいて実施した宣伝・PRにより、多くのメディアに本事業がニュースとして報道されました。ここに一部抜粋を紹介します。

日台スカラシップ 大賞に橋本真那さん

日本と台湾の青少年による文化交流の促進を目指す「第16回日台文化交流　青少年スカラシップ」（主催＝産経新聞社、フジサンケイビジネスアイ、共催＝台北駐日経済文化代表処、特別協賛＝アパホテル、JR東海、協賛＝エバー航空日本支社、三井物産、台湾新聞社）の受賞作品が決まった。

大賞には、橋本真那さん（文教大付属高3年）＝写真＝の作文「コンテンポラリー界を先駆ける台湾」が輝いた。審査委員長特別賞には大月陽菜さん（青稜高2年）、優秀賞には今井大貴さん（明治学院大1年）ら12人が選ばれた。

作文とスピーチ（中国語、台湾語）の2部門で学生を募集し、611点の応募があった。授賞式は3月19日に東京・大手町のサンケイプラザで行われ、大賞、審査委員長特別賞、優秀賞の受賞者を5泊6日の台湾研修旅行に招待する。

（2019年2月21日付　産経新聞）

友好の懸け橋に
日台スカラシップ表彰式

日本と台湾の若い世代の相互理解促進を目的とした「第16回日台文化交流　青少年スカラシップ」（主催・産経新聞社、フジサンケイビジネスアイ、共催・台北駐日経済文化代表処）の表彰式が19日、東京都千代田区のサンケイプラザで行われた。14人が受賞した。

「コンテンポラリー界を先駆ける台湾」と題した作文で大賞に輝いた文教大学付属高等学校3年の橋本真那さんには、台北駐日経済文化代表処の謝長廷代表から表彰状が贈られた＝写真。

謝代表は、受賞者を招待する5泊6日の台湾研修旅行を通じ、「同世代の人と交流し、たくさんの台湾の友達をつくってください。日本と台湾の友好の懸け橋となることを期待しています」と激励した。

受賞者を代表してあいさつをした橋本さんは「仲間とともに台湾への知識や理解を深め、日台の文化交流に貢献したい」と抱負を述べた。

（2019年3月20日付　産経新聞）

学生ら副総統表敬
日台スカラシップ

【台北＝田中靖人】日本と台湾の若い世代の相互交流促進を目的とした「第16回日台文化交流　青少年スカラシップ」（主催＝産経新聞社、フジサンケイビジネスアイ、共催＝台北駐日経済文化代表処）を受賞し、台湾研修旅行に参加した学生12人は20日、台北市の総統府で陳建仁副総統を表敬訪問した＝写真（総統府提供）。

陳氏は「台湾と日本の良好な関係は世界の模範と言ってよい。皆さんには台日関係の懸け橋になってほしい」と呼びかけた。学生らは、医師出身の陳氏に、台湾の医療水準が高い理由や、日本の若者に期待することを質問。陳氏は総統府の建物が今年で築100年になることを紹介し、「日本のどの駅に似ているでしょう」とクイズを出すなど、和やかに談笑した。

明治学院大学1年の今井大貴さん(19)は「総統府に来て身が引き締まる思いがした。将来、日本と台湾をつなぐ人材になりたい」と話していた。

（2019年3月21日付　産経新聞）

10　事業特集　Fuji Sankei Business i.

第16回 日台文化交流 青少年スカラシップ2019

きょう授賞式、台湾に出発

大賞 作文部門

コンテンポラリー界を先駆ける台湾

橋本 真那

（2019年3月19日付　フジサンケイビジネスアイ）

研修旅行から受賞者が帰国
■日台スカラシップ

日本と台湾の若い世代の相互理解促進を目的とした「第16回日台文化交流　青少年スカラシップ」（主催・産経新聞社、フジサンケイビジネスアイ、共催・台北駐日経済文化代表処）の受賞学生が24日、台湾での6日間の研修旅行を終え帰国した。

中学生から大学生までの一行は、陳建仁副総統を表敬訪問したほか、延平高級中学や東呉大学の訪問、学生の自宅でのホームステイを経験した。シニア世代が中心の団体「台湾歌壇」や「友愛グループ」とも懇談会を開き、世代を超えた交流も行った。

（2019年3月25日付　フジサンケイビジネスアイ）

宣伝・PR
各メディア
による報道

「友好の架け橋に」　日台スカラシップ表彰式

日本と台湾の若い世代の相互理解促進を目的とした『第16回日台文化交流　青少年スカラシップ』（主催・産経新聞社、フジサンケイビジネスアイ、共催・台北駐日経済文化代表処）の表彰式が19日、東京都千代田区のサンケイプラザで行われた。14人が受賞した。『コンテンポラリー界を先駆ける台湾』と題した作文で大賞に輝いた文教大学付属高等学校3年の橋本真那さんには、台北駐日経済文化代表処の蕭長廷代表から表彰状が贈られた。

謝代表は、受賞者を招待する5泊6日の台湾研修旅行を通じ、『同世代の人と交流し、台湾の友達をつくってください。日本と台湾の友好の架け橋となることを期待しています』と激励した。受賞者を代表してあいさつをした橋本さんは『将来とともに台湾への知識や理解を深め、日台の文化交流に貢献したい』と抱負を述べた。

（2019年3月19日付　産経ニュース）

TAIWAN

陳副総統、日台文化交流青少年スカラシップ一行の表敬訪問受ける

発信日時：2019-03-21（最終更新：2019-03-22）

陳副総統、日台文化交流青少年スカラシップ一行の表敬訪問受ける

陳建仁副総統は20日、日本と台湾の青少年による文化交流の促進を目指す「日台文化交流青少年スカラシップ」（主催＝産経新聞社、フジサンケイビジネスアイ）の入賞者一行による表敬訪問を受けた。一行は中学・年生から大学4年生まで合計12名。今年で16回

（2019年3月21日付　台湾週報）

自由時報

日台交流獎學金頒獎 14日本青少年獲獎將訪台

「第16屆台日文化交流青少年獎學金」19日舉行頒獎典禮，駐日代表謝長廷頒發獎狀給獲得大賞的橋本真那。（記者林翠儀攝）

（駐日特派員林翠儀／東京19日報導）由日本產經新聞主辦、我駐日代表處等協辦的「第16屆台日文化交流青少年獎學金」19日頒獎，駐日代表謝長廷到場頒獎，並在致詞時表示，希望獲

（2019年3月19日付　自由時報）

フォーカス台湾

陳副総統、日本の青少年訪問団と面会 友好関係発展願う／台湾

（台北21日 中央社）陳建仁副総統は20日、台北市の総統府で「第16回日台文化交流 青少年スカラシップ」の受賞者らと面会し、今回台湾を訪問した生徒や学生が日台友好の架け橋となるよう期待を寄せた。

同スカラシップは日本と台湾の文化交流促進を目指し、産経新聞社と日本工業新聞社が実施。台湾の台北駐日経済文化代表処（大使館に相当）が共催している。29歳以下の生徒、学生を対象に作文、スピーチを募集し、大賞、優秀賞受賞者を台湾研修旅行に招待した。

陳副総統は、日本は台湾にとって重要な隣国であり、歴史や文化、外交、経済などの分野において両国は不可分の関係になっているとし、若い世代の双方向の交流を通じて、日台の友好関係が永続的に発展していくよう願った。

（編集：名切千絵）

（2019年3月21日付　フォーカス台湾）

日台文化交流青少年スカラシップ
第16回　研修旅行の記録

発行・監修：　産経新聞社

編集・文・撮影：（株）臺灣新聞社
髙橋友梨香

デザイン・構成：（株）豊島

Scholarship Travel to Taiwan

Scholarship Travel to Taiwan

次の第17回日台文化交流青少年スカラシップに向けて

産経新聞論説委員　兼
フジサンケイビジネスアイ編集長
山本 秀也

　このプログラムは、日本と台湾の次世代交流を担う人材育成の一助となることを願って創設され、今回で16回目の実施となりました。その意義を認めて多大な支援を続けて頂いている台北駐日経済文化代表処、スポンサー企業の皆様に改めて御礼申し上げます。

　また、作文、スピーチ部門での応募審査や、現地での訪問や交流を快く受け入れて下さった日台双方の皆様のご協力にも深く感謝致す次第です。中高生との交流とホームスステイをお願いしている台北市中心部の私立延平高級中学では、昨年、今年と校舎の新築工事が進んでいます。すばらしい新校舎の落成をお祈りするとともに、こうした多忙を極める中でも交流に意を砕いて下さった劉永順校長をはじめ同校関係者の方々のご尽力も決して忘れることはできません。

　未来へ続く良好な日台関係を願う人々の思いが追い風となり、今回のプログラムには実に600人を超える応募がありました。いずれの部門も作文の執筆、あるいは日華両言語でのスピーチ原稿作成という知的作業が必須であることを思えば、台湾との交流の一線に立つことを望む日本の若い世代の熱意には大いに励まされます。応募作に描かれる台湾に関する知見や洞察も、プログラム創設当初から年々厚みを増し、多様な姿となっています。

　台湾で世界一流のコンテンポラリーダンスを舞う夢を作文に描き、大賞に輝いた橋本真那さんは、淡水にある代表的なダンスグループ「雲門舞集」のベースで将来の活躍を予感させる華麗な跳躍を一度限りですが披露してくれました。また、長崎県諫早市から参加した岸ふみさんは、学校の掲示板でみた募集ポスターをきっかけに、台湾への素直な興味を作文につづって高い評価を受け、初めての海外訪問として台湾の地を踏みました。台湾への関わり方や描く夢はそれぞれでも、若い才能が台湾の地でキラリと輝く場面に立ち会うことは、研修旅行の引率役として何よりの喜びです。

　日台の青少年交流をさらに広げるため、今後とも皆様のご支援をお願い申し上げます。